

八尾市文化財調査報告15

八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ

1987 . 3

八尾市教育委員会



八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ

矢 作 遺 跡
中 田 遺 跡
萱 振 遺 跡
東 郷 遺 跡

例 言

1. 本書は、昭和61年度に八尾市教育委員会が八尾市内で実施した埋蔵文化財調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室（室長朝田勇）が原因者に協力を求めて実施した。調査は文化財室職員米田敏幸、嶋村友子（嘱託）が担当した。
3. 本書には当該年度に実施した埋蔵文化財調査を巻末の一覧表に記載し、これらのうち成果のあった4遺跡、4調査地の報告を収録した。
4. 調査に際しては、中野龍介、中谷伸、河田英晃、上杉利一、清原直美、横山妙子、林賢吾、杉本尚子、藤田義成、富田芳久他諸氏の参加を得た。
5. 本書の作成は、主として米田が編集・執筆を担当し、萱振遺跡については杉本の協力を得た。また矢作遺跡出土資料の科学的分析については刑部小学校教諭奥田尚氏に依頼し、御寄稿いただきました。
6. 本調査期間中及び整理期間中には、下記の諸氏の御助言、御教示を得た。記して感謝したい。

奈良県立橿原考古学研究所 石野博信 九州大学 西谷正

仮称八尾市立歴史民俗資料館建設準備室 安井良三

大阪府教育委員会文化財保護課 福田英人

大阪経済法科大学 村川行弘

山本 昭

（敬称 略）

目 次

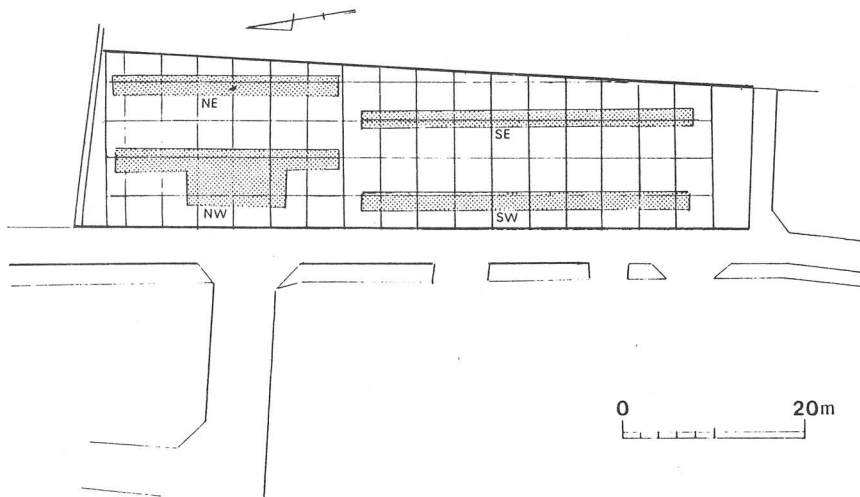
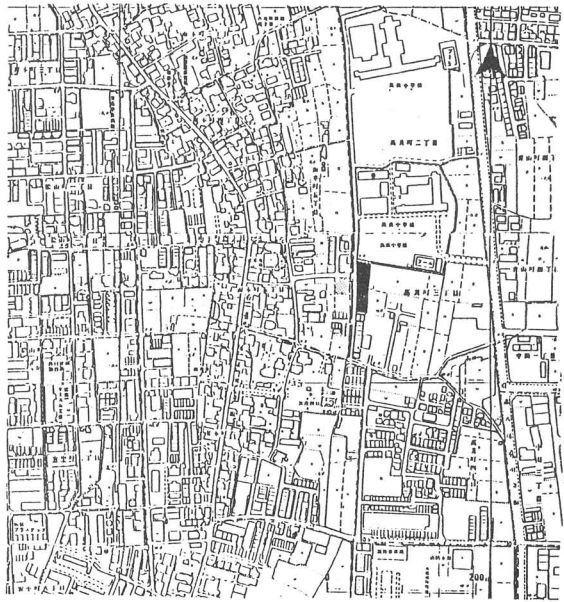
矢作遺跡発掘調査概要	1
中田遺跡発掘調査概要	17
萱振遺跡発掘調査概要	20
東郷遺跡22次発掘調査概要	29

矢作遺跡発掘調査概要

1. 調査に至る経過

矢作遺跡は、式内社である矢作神社を中心に八尾市高美町、南本町一帯に所在する弥生時代から古墳時代にかけて営まれた集落遺跡であると推定される。この遺跡は古代の大和川が形成した河内平野沖積地の微高地上に立地し、古墳時代の遺構面の標高はT P 8.5 m前後にあり、河内平野沖積地の遺跡の中でも比較的安定した微高地に立地する。同じ微高地には中田遺跡や小阪合遺跡、成法寺遺跡などの同時期の集落遺跡が隣接して所在しており、河内平野の中でも最も遺跡が密集する地域である。矢作遺跡は昭和56年に南本町5丁目住宅建設に伴う発掘調査で古墳時代と中世の遺構を初めて検出した。それ以来この遺跡において本格的な発掘調査は実施されたことがなかった。

八尾市高美町3丁目64-1で昭和60年11月28日と29日に共同住宅建設に先立って遺跡確認のため3ヶ所で試掘調査を実施したところ地表下50cm以下に



第1図 調査位置とトレンチ配置図

古墳時代の遺物包含層及び遺構を検出した。その結果に基づき申請者と協議し、基礎工事および浄化槽の埋設により遺構が破壊される部分を中心に発掘調査を実施することで合意した。調査は昭和61年3月17日より実施し、4月17日に終了した。

2. 調査の概要

調査は、計画建物の基礎に沿って幅2mのトレンチを4本設定し、それぞれNE区(2×24m)、NW区(2×24m)、SE区(2×36m)、SW区(2×36m)とした。なおNW区については浄化槽が予定されているためにさらに西側に幅4m長さ11mの拡張区を設定した。発掘は地表下40cmまでを表土として機械により掘削し、以下については慎重に手掘りを行ない、原則として2面の調査を実施した。調査で検出したのは弥生時代後期～古墳時代前期と古墳時代後期および中世の遺構である。

調査地の層位

調査前の現況は水田になっており、地表の標高はTP+8.9m前後であった。約15cmの耕土をはずすと地表下40cm～50cmまでが灰褐色の粘砂土または砂質粘土となっており、その下層の暗灰褐色の部分に中世の遺物が目だて含まれている。この下に、古墳時代の包含層(暗茶灰色～灰色粘質土)が10cm～15cmの厚みで存在している。古墳時代の遺構は、この下の淡黄褐色シルト層を基盤として掘りこんでいるが、遺構により掘込み面に若干のちがいがあがるようで、古墳時代包含層の中で検出できる遺構もある。

中世索掘り溝

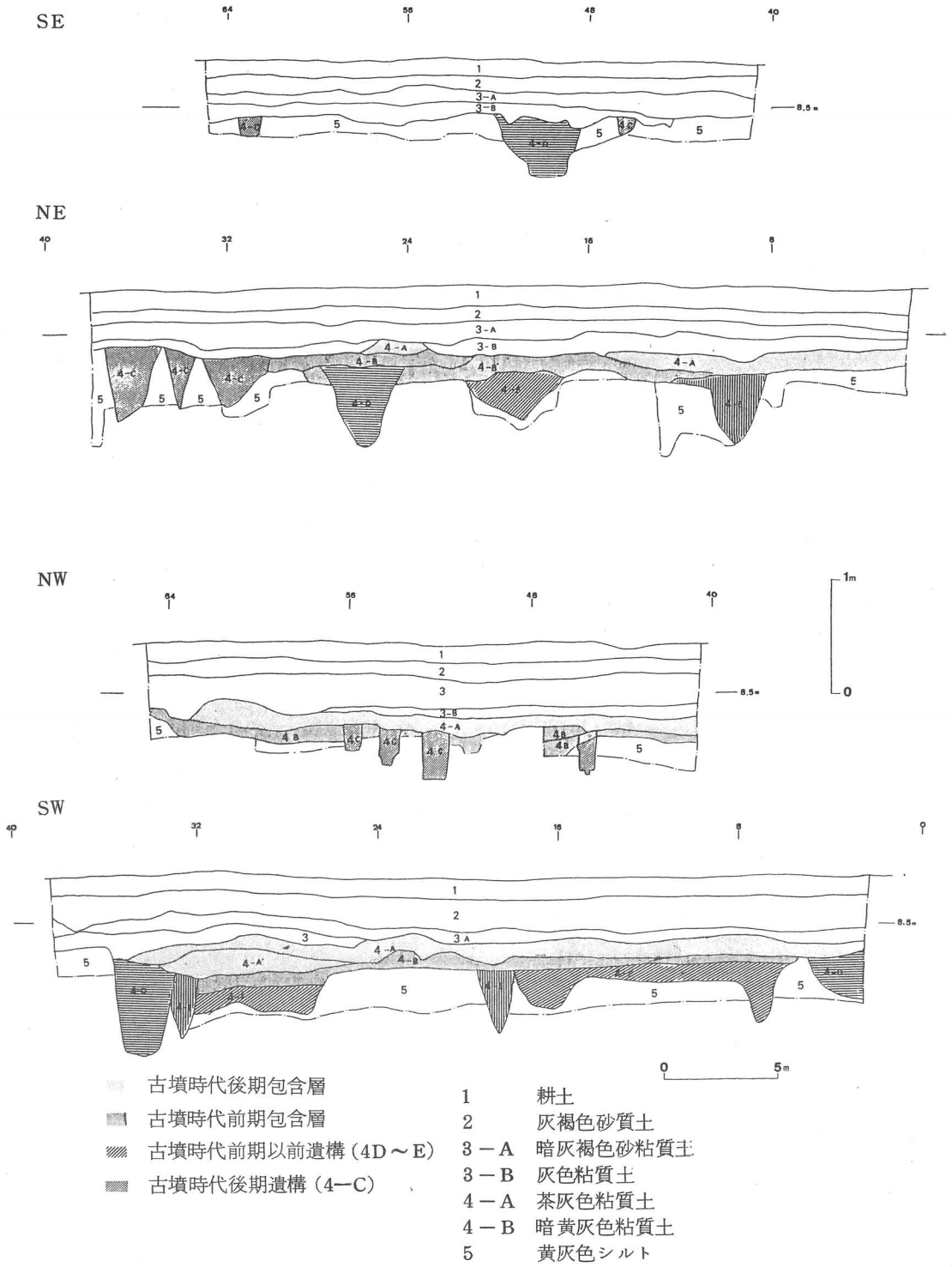
古墳時代の包含層上面で検出した複数の小溝で、各トレンチにおいてみられた。これらは幅10～30cm深さ5～20cmのもので、ほぼ南北方向に掘られている。これらの溝は中世以後の耕作に伴うものと考えられ、瓦器や陶磁器などの中世遺物が出土している。

古墳時代後期の掘立柱建物

調査地の北半にあたるNE、NW区で検出した遺構で暗黄褐色粘質土～黄褐色のシルトまたは砂質土を基盤にして掘りこまれた複数の柱穴からなる。柱穴の掘形はいずれも方形また隅丸方形の大型のもので柱の抜取穴の痕跡がみられる。建物は調査区全体で3棟以上存在すると推定できるが、調査区が限定されていたため全体の状況は明らかにすることができなかった。

S B 1 NW区の北側で検出した3間×4間の総柱の建物で、主軸はほぼ南北を向き、南北6.5m東西6.0mを測る。柱間は南北が約1.6m東西は中央が2.4m両側が1.8mで、桁間が梁間に対して短いのがわかる。柱の掘形は1辺が1.1～0.8mで、抜取穴は径25cm～65cmを測る。

S B 2 S B 1の南側に隣接する南北2間×東西3間の建物で、NW区の中央付近で検出した。



第2図 矢作遺跡断面図

建物の柱の並びはSB1に合わしているが主軸はやや西に振る。建物の規模は、南北3.6m東西5.5mで柱間の間隔は、南北が1.8m東西は中央が2.0m両側が1.7mを測る。柱の掘形は、一辺1.0～0.7mで、抜取穴は径25～80cmを測る。

SB3 NE区の南側で検出した3個の柱穴である。柱間の間隔は約2.3mで南北4.6m以上の建物の一部であろう。またNW区のSB2の南で検出した柱穴がこの建物に伴うものとする。と東西6.5m以上の建物と考えることもできる。

建物群を取囲む古墳時代後期の溝

建物群の西南から南にかけて弧を描いて3重に巡ると推定される溝でNW区の南端および拡張区南西隅、SE区北側において検出した。

SD1 NW区で北西から南東方向にのびる溝の北側の落ち込みを検出した。検出面からの深さは50cmで急傾斜で落ち込んでいる。溝の埋土は上層に茶褐色粘質土、下層に暗灰色粘土が堆積し、上層からは土師器高杯脚部が出土している。

SD3 NW区の北端で検出した溝で、SD1の延長であると考えられる。幅1.4m深さ64cmを測り、上層に暗茶褐色粘質土、下層に暗灰色粘質土が堆積している。

SD4 SD3の0.4m南で検出したSD3に平行する方向にのびる溝で幅1.1m深さ54cmを測る。埋土の堆積状況もSD3とほぼ同じで、下層からは6世紀後半に比定できる須恵器や土師器が複数出土した。

SD5 SD4のさらに0.4m南側で検出した溝で同じ方向にのびる。幅2.6m深さ44cmを測り、埋土の状況は基本的には他と同じであるが、トレンチ西側の最下層には黒色粘土が堆積していて、底が一段落ち込んでいる。埋土の上層からは、須恵器蓋杯の身が完形で一点出土した。

弥生後期から古墳時代前期の遺構

古墳時代後期以前の遺構は、溝、落ち込みなどがあり、主として調査地南側のSE区、SW区を中心に検出した。

SD2 NE区の中央付近で検出した溝で、幅3.2m深さ45cmを測る。

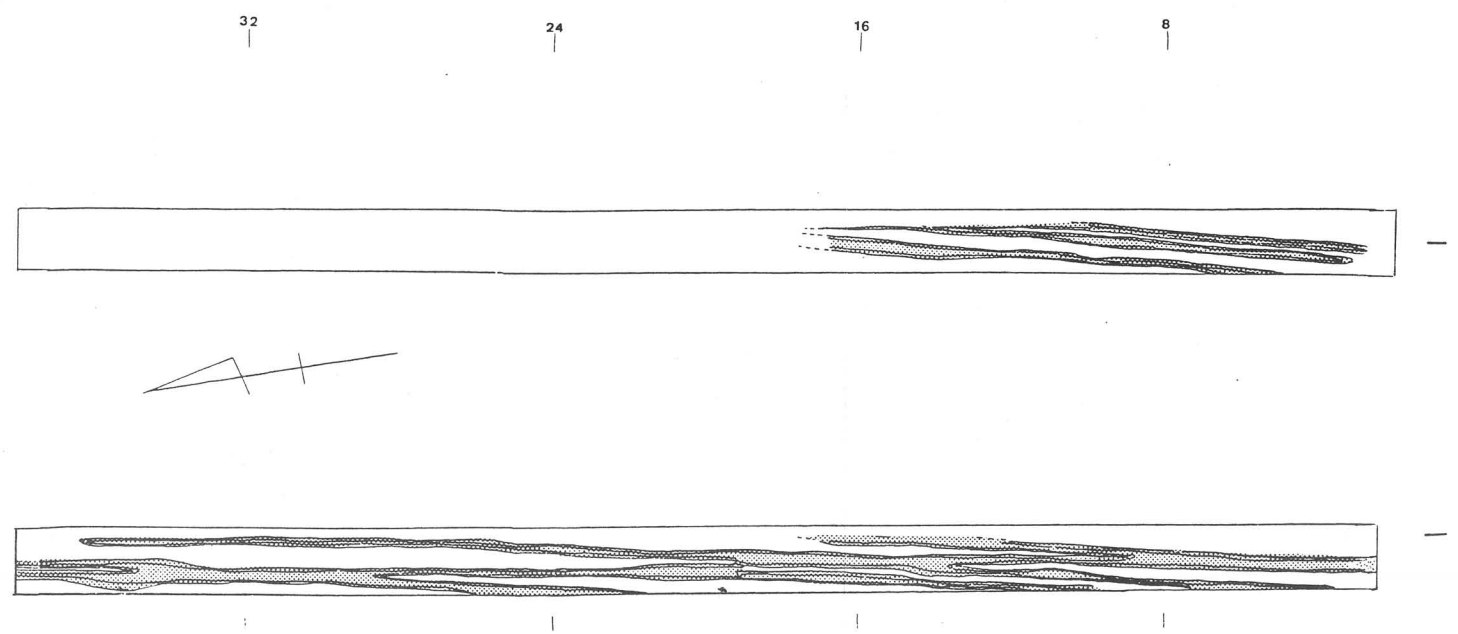
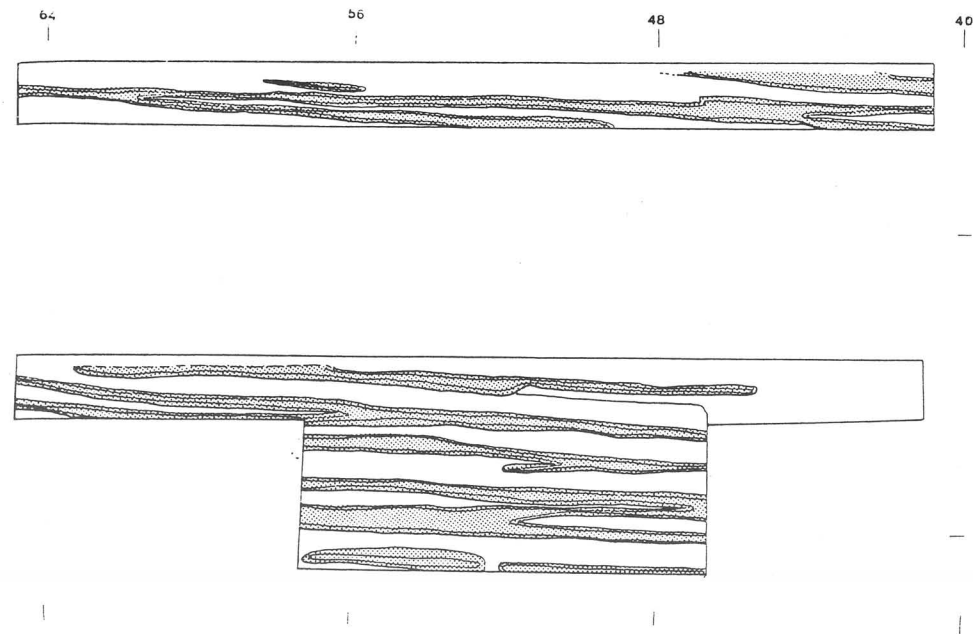
SD6 SE区の北半で検出した溝で、幅2.4m深さ70cmを測る。埋土の堆積状況は、上層に砂質土、下層に粘質土が堆積しており、下層から土器が若干出土した。

SD7 SE区で検出した溝で、幅2.4m深さ52cmを測る。溝の下層から弥生時代後期の土器が出土した。

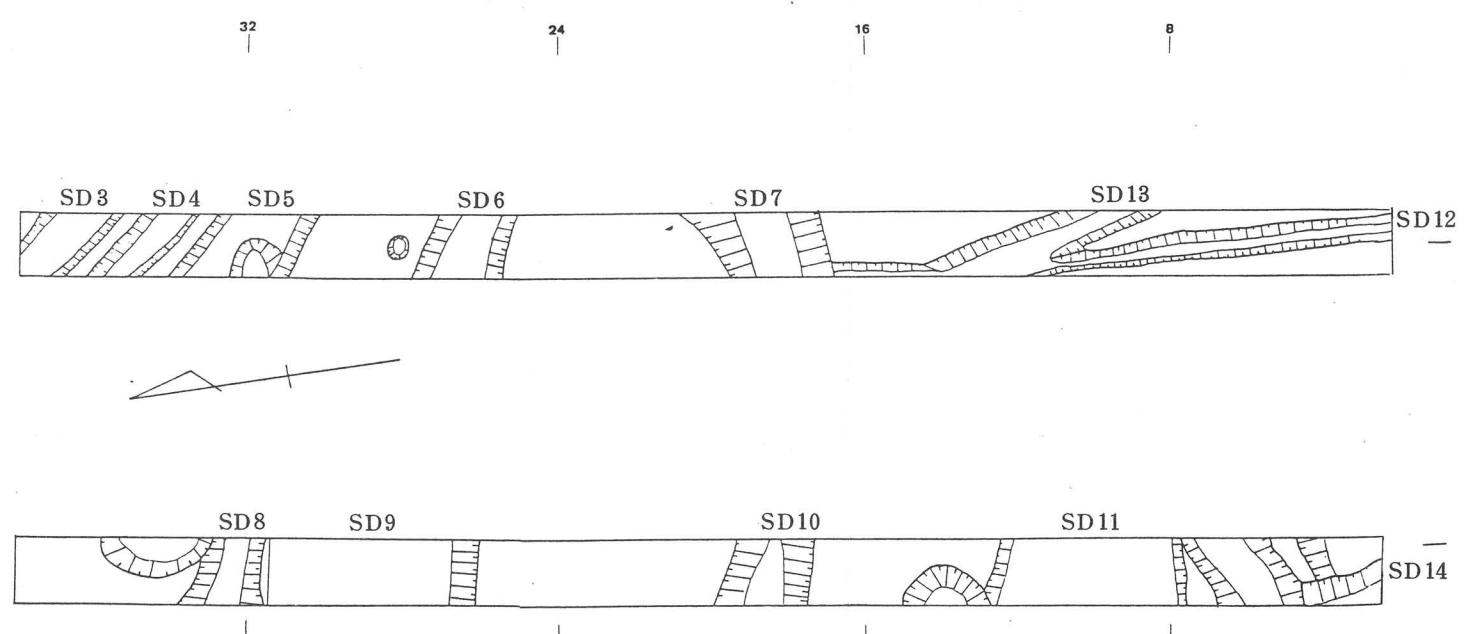
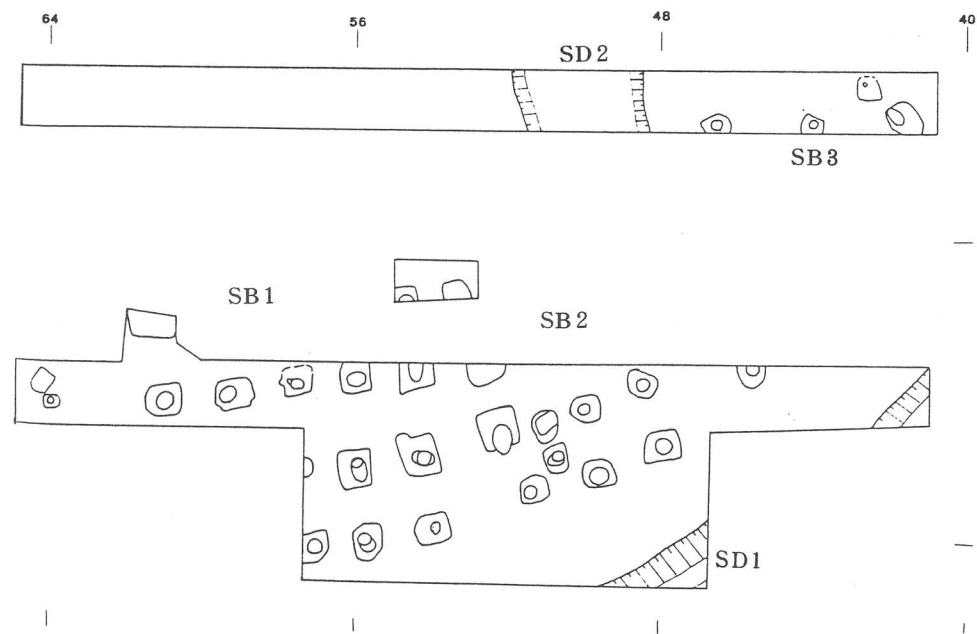
SD8 SW区の北側で検出した東西方向の溝でSD9の埋土上面から掘り込まれており、幅1.5m深さ60cmの断面V字状を呈する。埋土は黒灰色の粘土が堆積し、庄内式と考えられる古式土師器の土器片が若干出土している。

SD9 SW8の南側で検出した落ち込みであり、溝状の遺構であろうと考えられる。検出範

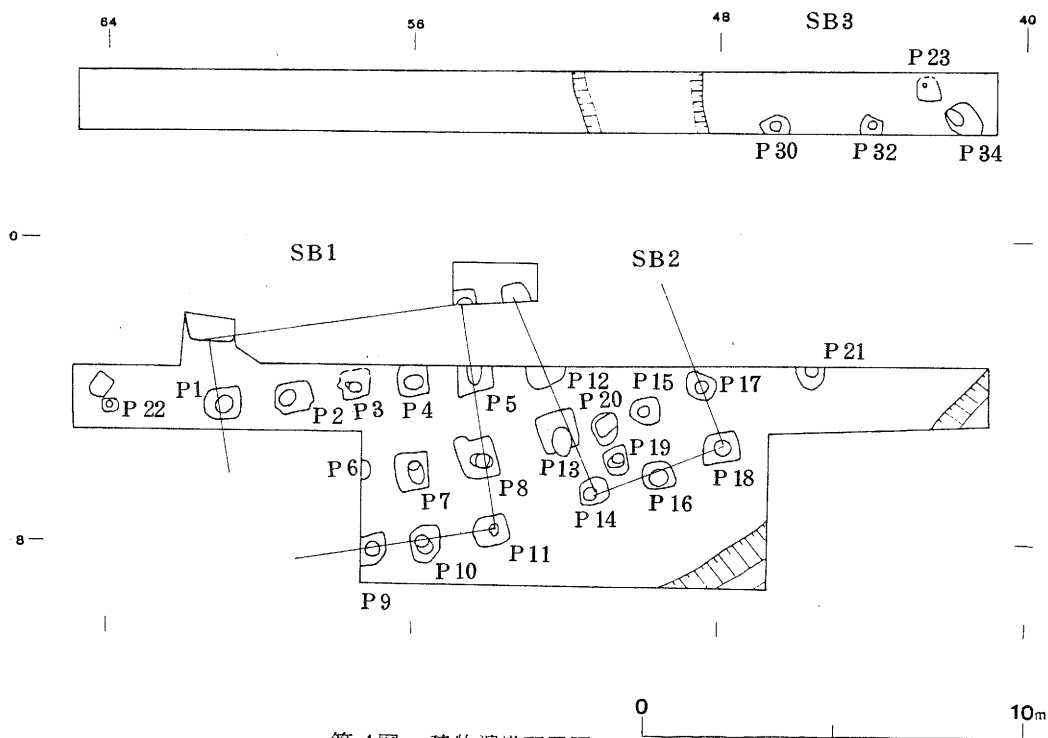
中世遺構



古墳時代遺構



第3図 遺構平面図



第4図 建物遺構配置図

表1 建物柱穴計測値一覧表 (単位cm)

番号	掘形	抜取穴	柱径	深さ	出土遺物	番号	掘形	抜取穴	柱径	深さ	出土遺物
P 1	100×88	50×40	20	30		P15	80×70	28×32	15	34	
P 2	104×84	48×38	32	28	庄内式壺片	P16	78×78	46×45	15	26	須恵器壺片、土師器片
P 3	80×-	50×32	25	29	土師器片	P17	88×68	38×34	16	27	
P 4	86×-	50×40	38	45		P18	96×76	43×40	17	52	土師器片
P 5	91×-	46×46	37	37	古式土師器片	P19	60×76	46×35	22	19	土師器片
P 6	-×10	52×52	40	32		P20	70×75	64×43	20	39	礎石有
P 7	90×10	70×43	40	42	須恵器壺片、土師器片	P21	79×-	42×42	33	39	
P 8	95×96	64×42	33	40		P22	48×40	24×24	18	13	
P 9	-×70	36×36	30	33		P23	42×56		13	10	
P10	80×10	52×36	28	28	土師器片	P31	78×-	30×24	12	47	土師器片
P11	82×68	34×26	25	22	庄内式土器片	P32	64×-	18×16	12	37	
P12	103×-			31	土師器片	P33	50×-	16×14	10	48	土師器片
P13	92×10	70×50	40	40	須恵器、土師器、弥生式土器片	P34	85×-	55×28	10	41	須恵器壺片、土師器片
P14	75×65	38×38	32	27	土師器片						

囲は南北 5.5 m で、深さ 40 cm を測る。濃灰色のシルトを堆積土とし、弥生時代末ないし古墳時代初頭の土器が出土している。

S D 10 SW 区の中央付近で検出した東西方向の溝で、幅 2.2 m 深さ 60 cm を測り、上層に黒灰色の炭化物層が堆積し、下層は青灰色粘土で最下層より古式土師器体部片が出土した。

S D 11 SW 区の南側で検出した落ち込みで、検出幅 5 m 深さ 50 cm を測る。濃灰色シルトを堆積土とする。

S D 12 SE 区の南側で検出した南北方向の溝である。溝は灰色粘土を堆積土し、円筒埴輪片や平安時代前期の杯が出土した。

S D 13 SE 区の南側で検出した南東から北西方向の溝で、S D 12 に切り込まれて交差している。幅 1.2 m 深さ 60 cm を測り、溝底近くより庄内式末または布留式に比定できる小型丸底壺(26)、直口壺(27)、複合口縁壺(28)と小型の銅鏡が出土している。

S D 14 SW 区の南端で検出した溝で、幅 2 m 深さ 0.4 m を測り、東西方向からトレンチ西側で L 字に曲り、調査区外に至る。溝内から埴輪片が出土している。

3. 出土遺物

弥生時代後期の遺物としては、SW 区包含層より出土した長頸壺(8)がある。S D 9 出土土器(1～7)、S D 11 出土土器(9.10)は弥生時代後期末の土器の特徴を持つ甕(5～7.10)があるが、装飾複合口縁壺(1)や丸底の鉢(3)など庄内式に典型的にみられる器種を含むことから庄内式古相に並行する可能性が強い。なお(1)は搬入土器と考えられる。

S D 13 出土の 3 点の壺(26～28)は布留式の最古相または庄内期 V に比定できる小型丸底壺⁽¹⁾(26)を含む。いずれも赤褐色の色調を呈し、銅鏡とともに祭祀用に用いられたものであろう。

S D 12 出土の円筒埴輪の特徴をもつものであり、近在に古墳の存在を想定させられるものである。

S D 1.3～5 では古墳時代後期の土器(11～21)が出土している。須恵器杯(11～15)は陶邑編年のⅡ型式 4 段階の特徴を持つものである。⁽²⁾

上層遺構面、包含層出土の遺物としては、奈良時代の須恵器(24)、青磁碗(25)、宋銭(皇宋通宝)が出土している。

S D 13 出土の銅鏡について

銅鏡の出土状況は、鏡面を上にしており、鏡の上には壺(27)が冠さった状況で出土している。銅鏡は面径 8 cm、厚み 2 mm で銅鏡としては比較的小型のものであり、倣製鏡と考えられる。鏡の鋳あがりは良好で銅質も良く、現在も錆ずに光沢を持っている。鏡背の特徴は幅の広い偏平な鏡縁の内側に直行する長めの櫛歯文帯を有し、鈕は肉厚で珠文帯と圈線がとり巻いている。

この圏線と櫛歯文帯の間に獣文帯が彫られている。獣は、身体部分を半肉彫りで表現され、他は雲文様の線彫りで表されているがかなり象形化が進んでいる。しかしこれらの獣は、それぞれ龍、鳥、その他2動物を表していると解釈され、変形四獣鏡であると考えられる。この鏡の時期は、伴出した土器より、庄内期Ⅶつまり布留式の最古の段階が考えられるが、この種の鏡が古墳時代中期以降とする従来の定説とは土器型式上異なることになる。しかしこの鏡が亀井遺跡で出土している重圏文鏡等弥生時代の小型倣製鏡の系譜をひくものであり、獣文帯の獣も舶載鏡の文様構成に忠実であることからすると、この鏡の時期にも整合性が存在することになる。

なお同文鏡としては御旅山古墳の獣文鏡等があるが、⁽³⁾ 時期的にも当鏡の方が古く、鏡式も先行する特徴を持っている。

表2 出土遺物観察表 SD9(1~7) SW区包含層(8) SD11(9.10) SD1.3.4.5(11~21)

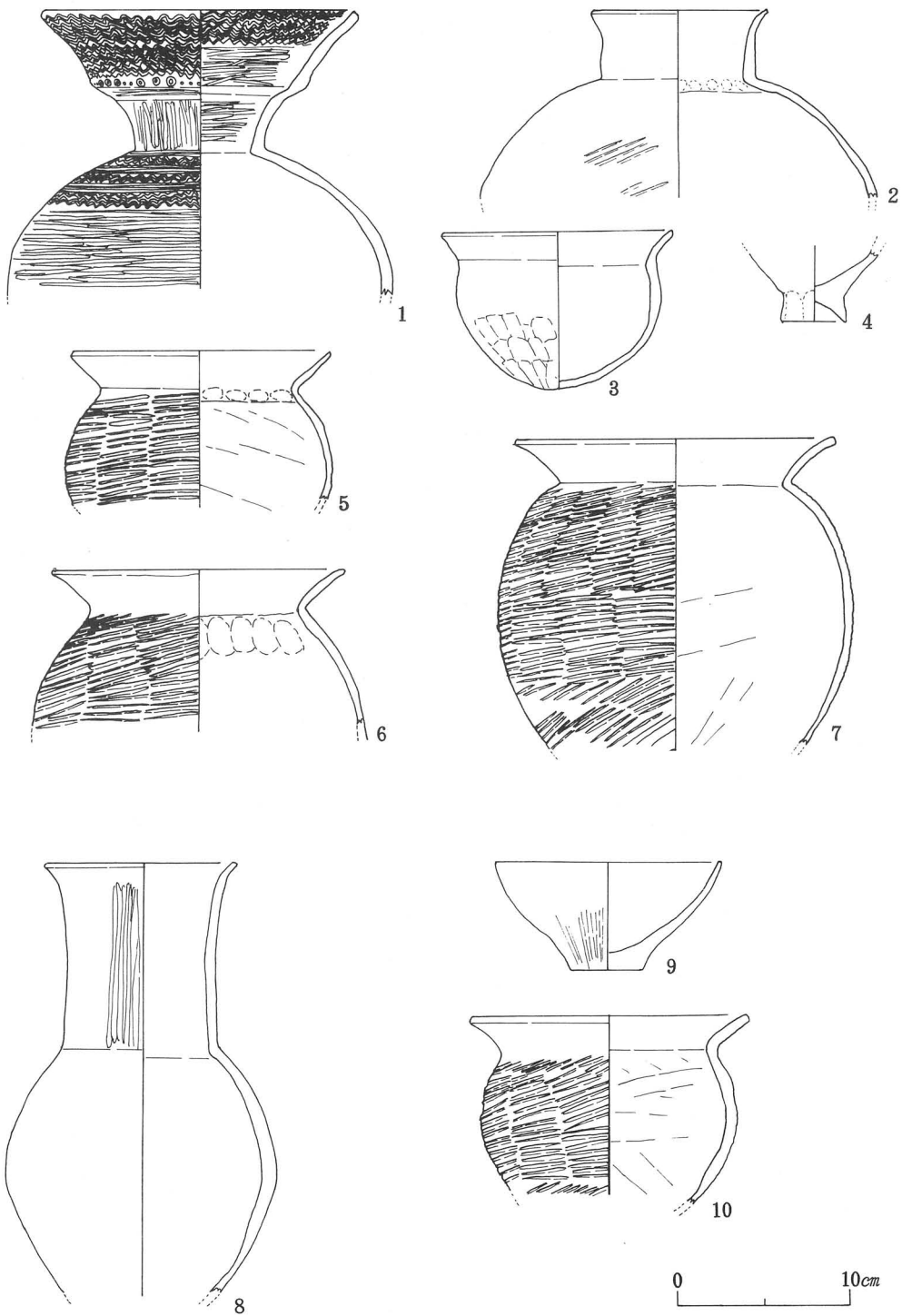
No.	器種	法量(cm)	調整・技法の特徴	色調胎土等
1	壺	口径 18.4	複合口縁の上半外面に波状文と竹管刺突円形浮文、内面口端部に波状文、体部肩に櫛歯直線文で加飾する。口縁内外面と体部外面は篋磨き、体部内面と体部外面内面はナデ	色調乳褐色胎土花崗岩チャート泥岩等が多い
2	壺	口径 10.4	直立する口縁部は内外面横ナデ。体部外面は叩き後篋ナデ、内面ナデ。	色調暗黄褐色胎土精良
3	鉢	口径 13.6 器高 9.8	外反する口縁は内外面横ナデ。丸底の体部は上半横ナデ、下半篋ナデ、内面ナデで底に指頭圧痕	色調暗茶褐色胎土角閃石多い
4	鉢	底径 3.9	突出する底部は外面指ナデ、体部は内外面ナデ	色調暗褐色胎土花崗岩含む
5	カメ	口径 15.1	外反する口縁は内外面横ナデ。体部外面は叩き内面は篋ナデ。	色調淡黄褐色胎土石英長石多い
6	カメ	口径 17.1	外反する口縁は内外面横ナデ。体部外面は叩き内面はナデ	色調淡赤褐色胎土石英長石多い
7	カメ	口径 18.7	外反する口縁は内外面横ナデ。体部外面は叩き内面はナデ	色調黒褐色胎土石英長石多い
8	壺	口径 11.4	口縁部外面篋磨き、内面ナデ。体部内外面ナデ	色調茶褐色胎土石英長石多い
9	鉢	口径 13.8 器高 6.2	口縁部内外面横ナデ。体部外面板目による縦ナデ、内面篋ナデ。	色調暗茶褐色胎土花崗岩多い
10	カメ	口径 16.2	外反する口縁は内外面横ナデ。体部外面は叩き内面篋ナデ	色調淡褐色胎土花崗岩多い
11	杯蓋 (須恵器)	口径 15.9 器高 4.0	外面天井部回転篋ケズリ、立ちあがり回転ナデ内面回転ナデ	色調灰色胎土石英長石多い
12	杯蓋 (須恵器)	口径 15.2 器高 4.1	外面天井部回転篋ケズリ、立ちあがり回転ナデ内面回転ナデ	色調淡灰褐色胎土チャート多い
13	杯身 (須恵器)	口径 10.2	体部、立ちあがり共内外面回転ナデ底部欠損	色調灰色胎土致密
14	杯身 (須恵器)	口径 10.8	外面底体部4/5回転篋ケズリ、以上口縁迄回転ナデ、内面回転ナデ	色調灰色胎土致密
15	杯身 (須恵器)	口径 13.0 器高 4.4	外面底体部2/3回転篋ケズリ、以上口縁迄回転ナデ、内面回転ナデ	色調灰色胎土チャート含む
16	瓶 (須恵器)	口径 6.8	内外面回転ナデ、内面灰かぶり口縁部のみ	色調暗灰色胎土致密
17	壺	口径 16.8	内外面口縁部横ナデ、体部ナデ、見込みは指ナデ	色調赤褐色胎土精良
18	杯	口径 17.1	口縁部内外面横ナデ、体部外面指ナデ内面ナデ	色調赤褐色胎土石英長石含む

表2 出土遺物観察表 SD7(22) SD12(23) 上層包含層(24.25) SD13(26～28)

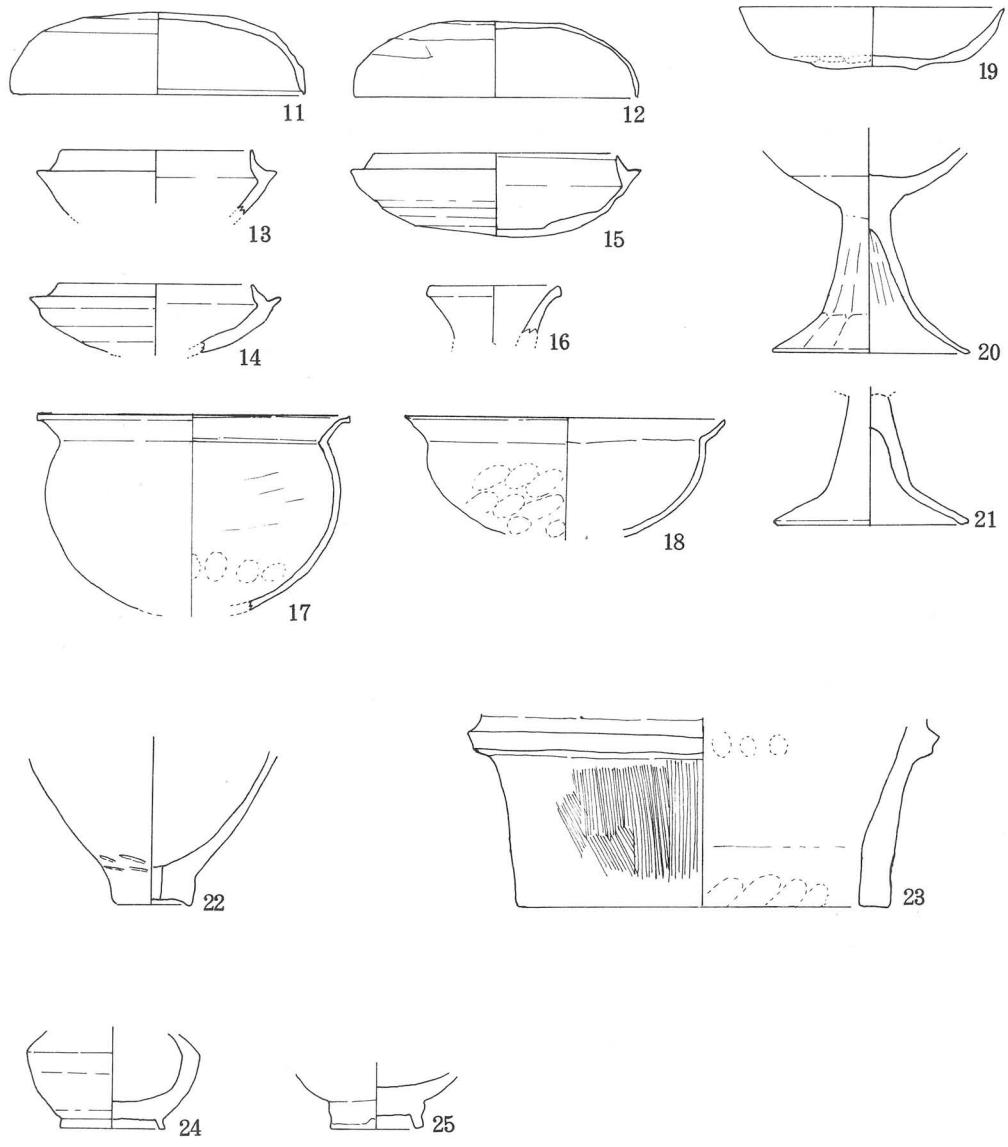
No.	器種	法量(cm)	調整・技法の特徴	色調胎土等
19	杯	口径 14.2 器高 3.2	口縁部内外面横ナデ、底部外面指ナデ内面ナデ	色調淡赤褐色 胎土花崗岩多い
20	高杯	脚径 10.6	杯底部外面指ナデ、内面ナデ 脚部外面篋ナデ、内面ナデ	色調赤褐色 胎土石英長石含む
21	高杯	脚径 10.4	脚部外面篋ナデ、内面ナデ	色調赤褐色 胎土精良
22	甌	底径 4.1	外面叩き後ナデ、内面ナデ底部中央に径1cmの 孔を焼成前にうがっ	色調暗褐色 胎土角閃石多い
23	円筒埴 輪	底径 19.8	外面縦または斜め刷毛目、底部付近横ナデ 内面ナデ、底部付近指ナデ	色調淡黄褐色 胎土花崗岩チャー ト含む
24	壺 須恵器	高台径5.6	体部外面上半回転ナデ、下半回転篋ナデ、底部 篋切り、内面回転ナデ	色調黄灰色 胎土精良
25	青磁碗	高台径5.0	内外面回転ナデ、底部に糸切り痕。釉は厚く底 部高台は露胎	釉調灰緑色 胎土灰色砂粒含む
26	小型丸 底壺	口径 11.4 器高 7.6	口縁部から体部にかけて内外面細かい横の篋磨 き。底部付近外面は不整方向篋磨き。外面に赤 色顔料	色調黄褐色 胎土精良
27	直口壺	口径 12.1 器高 11.5	口縁部内外面及び体部外面上半細い横方向篋磨 き、体部外面下半篋ナデ後不整方向篋磨き、体 部内面は上半刷毛ナデ、下半ナデ	色調赤褐色 胎土精良
28	複合口 縁壺	口径 11.9	口縁部内外面横ナデ、体部内外面ナデ	色調赤褐色 胎土石英長石含む

註

- (1) 米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器について」『考古学論集Ⅰ』考古学を学ぶ会 1985
- (2) 中村浩『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978 他
- (3) 田代克己『羽曳野市壺井御旅山古墳発掘調査概要』大阪府教育委員会 1968

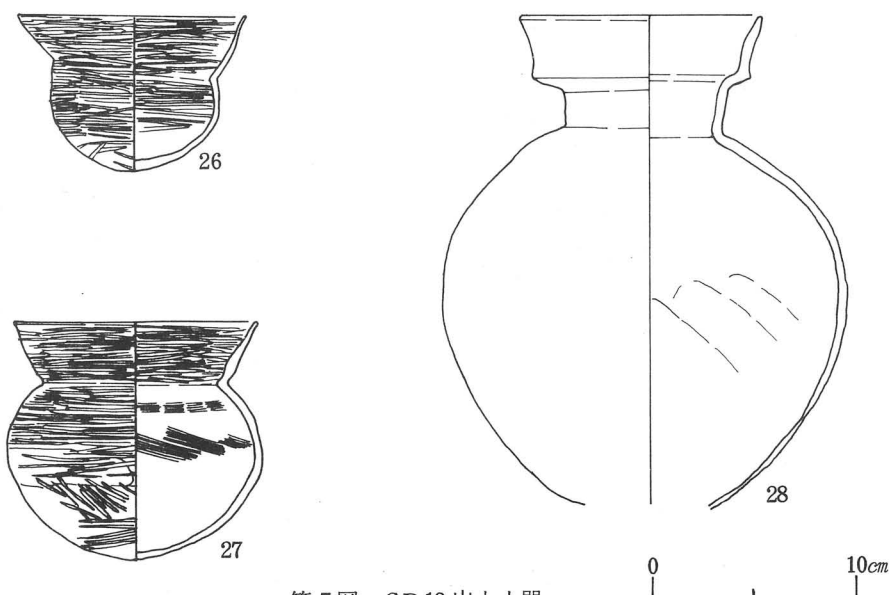


第5図 出土遺物

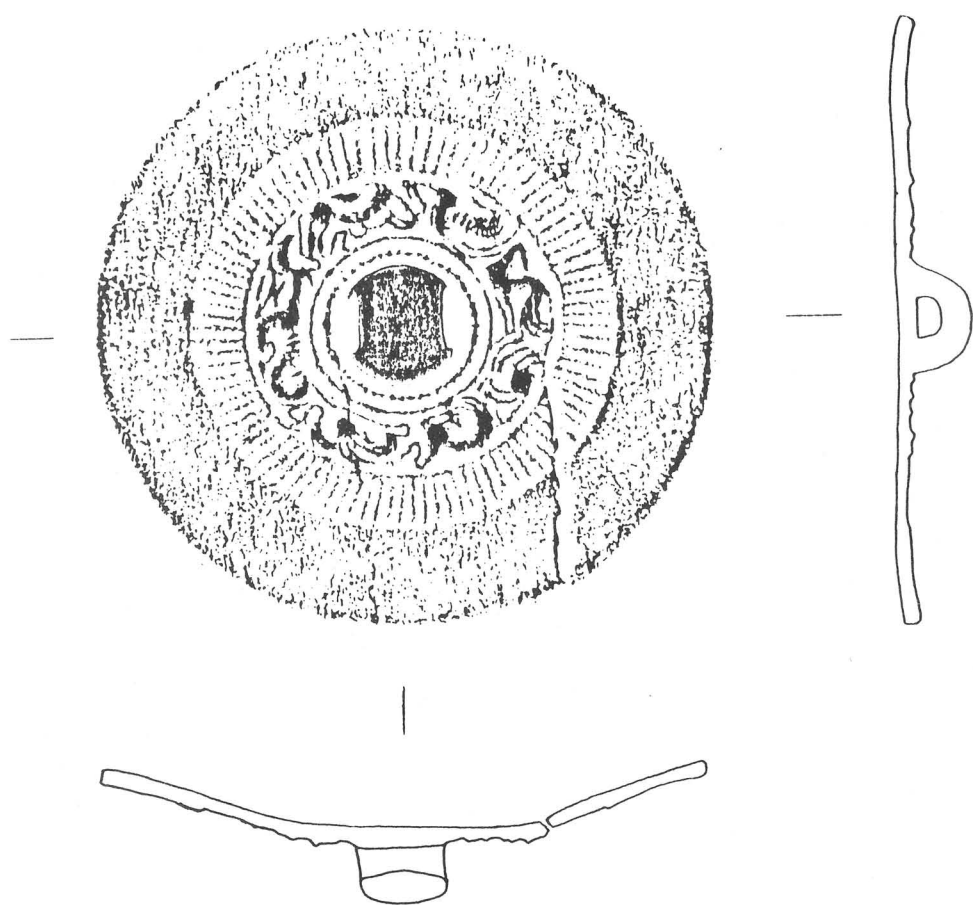


第6図 出土遺物

0 10cm



第7图 SD13出土土器



第8图 SD13出土铜镜拓影 Scal = 1/1

4. 出土試料の科学的分析

S B 2 柱穴内 (P 20) の礎石石材について

礎石を裸眼と倍率30倍の実体鏡で観察した。礎石は板状節理が発達した板状の石材である。柱状節理面と板状節理面の交斜角度は70度である。板状節理の1枚の厚さは3 cm～4 cmである。石材の寸法は34 cm×27 cmで、厚さが最大7 cmである。石材は輝石安山岩である。表面に赤色顔料(ベンガラ?)が塗られた痕跡がある。

輝石安山岩：色は灰色である。板状節理が顕著である。発泡孔が僅かに見られる。孔径は0.5 mm～12 mmで、孔形は不定形である。捕獲品の石英は、無色透明で、周囲が僅かに熔融されている。粒形は、球状、楕円状、不定形で、粒径が0.5 mm～16 mm、量ごく僅かである。造岩鉱物は、裸眼で観察しがたい長石・角閃石である。長石は無色透明、短柱状の自形である。粒径は0.2 mm～0.5 mmで、量が中である。輝石は、黒色、黒褐色で、柱状の自形である。粒径が0.1 mm～0.2 mmで、量が多い。石基は灰色玻璃質で固い。

礎石の石材と同質の岩相を示す岩石を発掘地点から近距離で求めるとすれば、板状節理が顕著で、石英の捕獲品が含まれ、玻璃質であることから、柏原市峠南方の亀ノ瀬付近に分布する明神山火山岩の岩相の一部に酷似する。石材の最初の採取地は亀ノ瀬付近と推定されるが、赤色顔料が塗られた跡があることから、堅穴式石室の石材を転用した可能性がある。この輝石安山岩と同じ石材を使用した古墳には、津堂城山古墳、天理市櫛山古墳等のような長持形石棺を持つ中期古墳や玉手山9号墳がある。また、八尾北高校内のような平地で古墳が発見されたり、東弓削付近では楕形埴輪が出土していることなどから、付近の古墳の堅穴式石室の石材を転用した可能性がある。

S D 13 出土銅鏡のX線による分析

鏡に付着している赤色物質と鏡の成分についての分析を奈良国立文化財研究所肥塚氏に依頼した。表面に付着している赤色物質の分析にはX線粉末法を、鏡の成分分析には蛍光X線法を使用した。

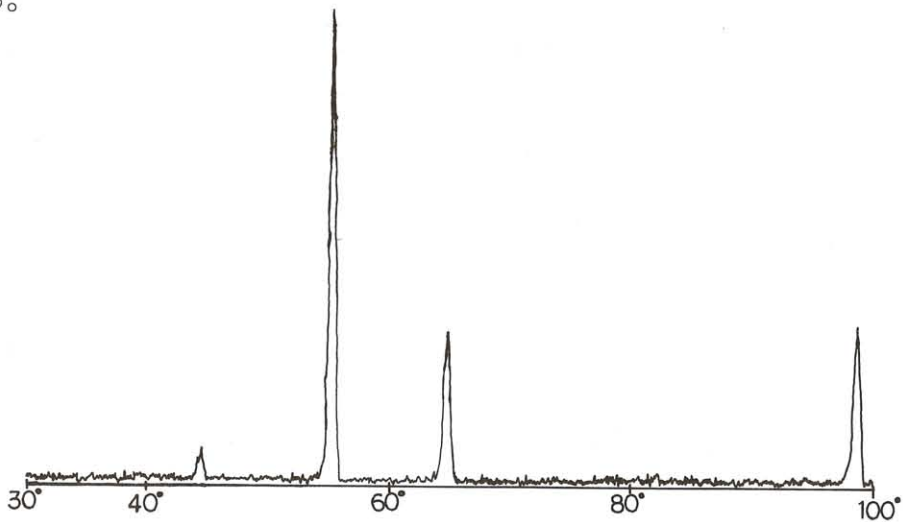
表面に付着している赤色の物質は、回折角度とその反射強度をASTMAカードと比較した結果、赤銅鉱(Cuprite、 Cu_2O)であることが判明した。赤銅鉱は銅鉱床の酸化帯に自然銅、孔雀石などと共生し、広く分布することから、銅鏡の銅が酸化してできたものであろう。

鏡の成分は反射角度と反射強度から、Cu、Sn、Pbを主成分とする青銅で、Ag、As、

表3 赤色物質の回折結果

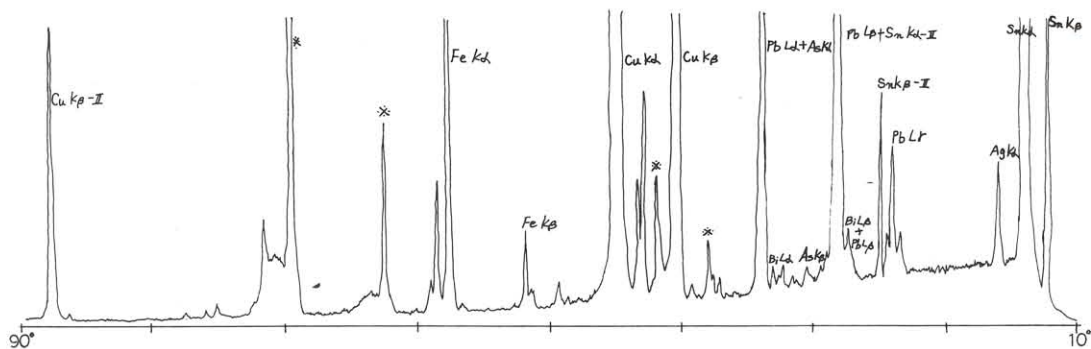
赤色物質			ASTMAカード 5-0667 赤銅鉱	
2θ (°)	I/I ₀	α (Å)	I/I ₀	α (Å)
44.6	7	3.010	9	3.020
55.44	100	2.461	100	2.465
64.86	32	2.134	37	2.135
98.7	34	1.508	27	1.510

Bi、Feが検出されるのみである。Ni、Co等については検出限界を越えているため不明である。



第9図 赤色物質のX線粉末法回折図

実験条件 Target : Cr、Filter (Monochro) : ~~Cr~~、Voltage : 30 KV、Current : 10 mA、Slit : DS. 34、RS. 34、Scan speed : 5 deg/min



第10図 蛍光X線法による鏡からのX線反射

実験条件 Target : Cr、Voltage : 40 KV、Current : 20 mA、Crystal : LiF、Scanning speed : 1 deg/min、Full Scale : 1×10^3 CPS、Method : Continuous Soans

※印 : TargetからのX-Ray

5. ま と め

この調査は、矢作遺跡範囲内で組織的な発掘調査としては始めて実施したものである。これによって断片的にはあるが当遺跡の性格が明らかになったことの意義は大きい。特筆すべき今回の調査の成果は以下の諸点に要約できよう。

1. 上層遺構面の南北方向の小溝は、条里の方向に一致し、中世における耕作の痕跡を知ることができる。
2. 調査区北半の古墳時代後期の三棟以上の大型高床式建物と3重に巡る溝（推定）は通常の集落のありかたと著しく異なるものであり、豪族の居館のようなものの存在を推定させられる。これらの遺構の廃絶時期は、溝（SD 1.3.4.5）出土須恵器の時期より、おおよそ6世紀末を前後する時期と推定され、奇しくも記紀に云う物部氏本宗家の滅亡の時期に一致する。このことと直接の関連性は不明であるが、近在の矢作神社の存在や、弓削の地域に近接することから物部氏と何等かの関わりが存在することが考えられる。今後類例の比較検証とともに、成法寺遺跡など付近の同時期の集落遺跡との関連性を追及する必要があるだろう。
3. SD13出土の鏡は、出土状況の特異性ととも、この種の倣製鏡の年代観に新たな材料を呈示したといえる。
4. 弥生時代後期から庄内式の遺構は、同時期の遺構が小阪合遺跡、成法寺遺跡、中田遺跡など同時期の遺構が周辺遺跡一帯に広がることから、これら一連の遺構群の繋がりの中で捉えなければならないであろう。しかし、当遺跡の形成時期を示す資料となりそうである。

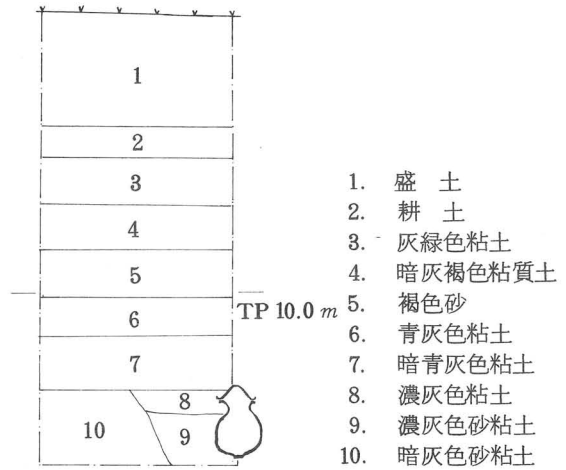
中田遺跡発掘調査概要

1. 調査に至る経過

中田遺跡、東弓削遺跡は長瀬川と玉串川に囲まれた範囲に位置する弥生時代から鎌倉時代に至る迄の集落遺跡である。今回の調査地は、八尾市八尾木4丁目5番地に所在し、この両遺跡の接点に位置する。当調査地付近においては円筒埴輪棺の出土が知られ、昭和58年と60年に西約50mで(財)八尾市文化財調査研究会と大阪府教育委員会によって発掘調査が実施されており、古墳時代初頭と弥生時代中期の遺構を検出している。昭和61年7月2日に共同住宅建設に先だって遺構確認調査を実施したところ、地表下約2.5m付近に古式土師器を含む遺物包含層を検出した。この為、施工者側と協議した結果、遺構が破壊される部分に限定して記録保存を行なうことで合意し、昭和60年9月24日～30日まで発掘調査を実施することにした。調査は、基礎の予定位置16箇所A～Pの調査区に3m×3mのグリットを設定し、地表下1.5mまで機械掘削した後地表下2.5mまでは1m×1mの範囲の手掘りを実施した。また浄化槽予定位置については4×10mの範囲で同様に調査を実施した。



調査位置図 S = 1/5000

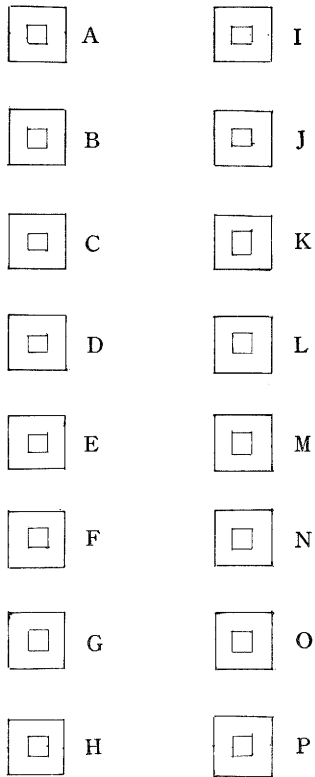


調査地基本層序図 (Jグリット) S = 1/40

2. 調査の概要

調査地の層位は、TP 11.5mの地表から約60cm～80cmの盛土を除去すると旧耕土以下包含層まで灰緑色粘土、灰褐色粘質土、褐色砂の順に堆積している。包含層は、TP 10m以下に60cm～80cmの厚みで存在する。上層20～30cmは青灰色粘土で遺物が少なく、下層は暗青灰色から暗灰

浄化槽調査区



調査区設定図

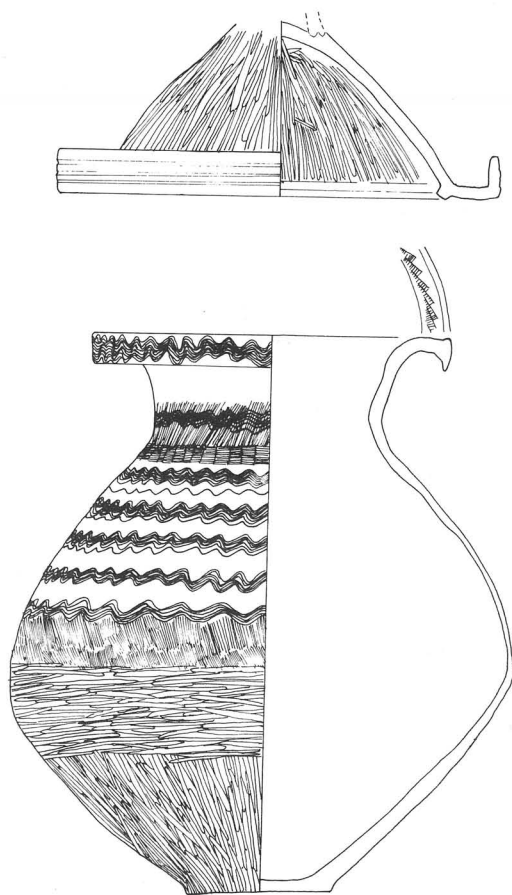
0 10m

色粘質土となり、下層を中心に古式土師器が出土している。包含層の下は暗灰色粘砂土から淡青灰色粘土または砂質土となっている。J調査区においてはこの暗灰色粘砂土を切り込んで弥生時代中期の遺構が掘り込まれている。また浄化槽部分では調査区の南西隅に、青灰色砂質土を切り込む古墳時代の遺構を確認した。

出土遺物としては、古式土師器と弥生時代中期の土器があげられる。古式土師器は各調査区で多数出土し、特にF.P.G.浄化槽調査区からの出土量が多かった。なかでもG区からは山陰地方の複合口縁壺、浄化槽区からは土錘や東海地方のS字状口縁甕などが破片で出土していることが注目できる。これらの土器の時期は、出土した庄内甕や小型器台などの破片から庄内式新相から布留式古相の時期が想定される。J区で検出した弥生時代の遺構からは、弥生時代後期の壺棺と思われるもの(図)を検出している。これは壺型土器の上に高杯杯部を合わせ口にしたもので、遺骨こそ検出できなかったが壺棺とみてほぼ間違いのないであろう。壺は体部最大径が中位より下にあるもので、口縁端部から体部上半までに7本の波状文を施し、頸部に一条の廉状文がみられる。下半部は丁寧に篋磨きをし、上半に刷毛目が観察できる。色調は暗黄灰色で沖積地の胎土を示す。高杯は脚部を欠くが杯部内外面を篋磨きし、口縁端部に凹線がみられる。色調は暗茶褐色を呈し生駒山地西麓の胎土をもつ。これらの土器の特徴から時期的には弥生時代中期後半に位置づけることができる。

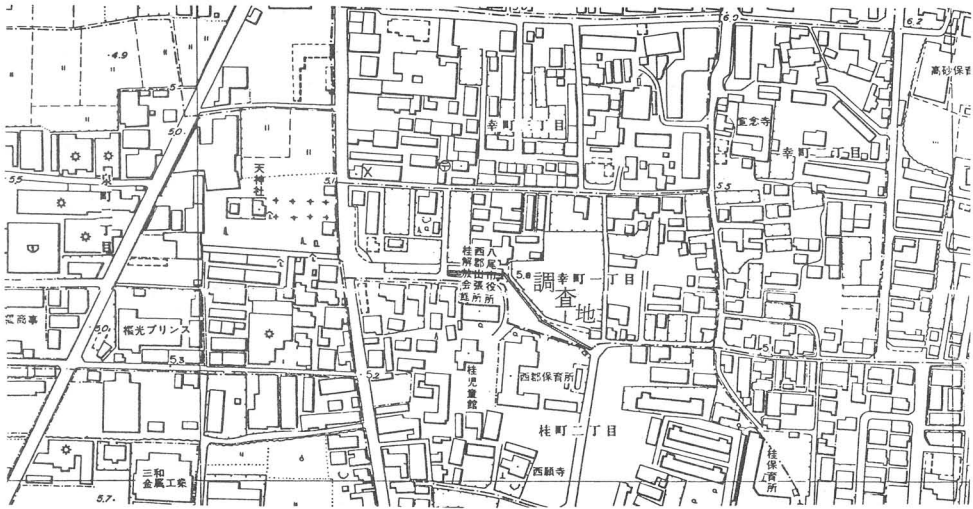
3. まとめ

今回の調査は、部分的な調査に留まらざるを得なかったため、遺構の存在状況については明確に把握することができなかった。しかし検出した古式土師器と弥生時代中期の壺棺の存在は、当遺跡の西方で調査された遺構群と時期的に符合し、中田遺跡南部における遺構群の時期と層位を明確にし、東弓削遺跡との繋がりを考える上での基礎的な資料となることはいうまでもない。今後当調査地周辺における調査の進展が待たれる。



Jグリット出土壺棺実測図 S = 1/4

萱振遺跡発掘調査概要



調査位置図 S = 1/5000

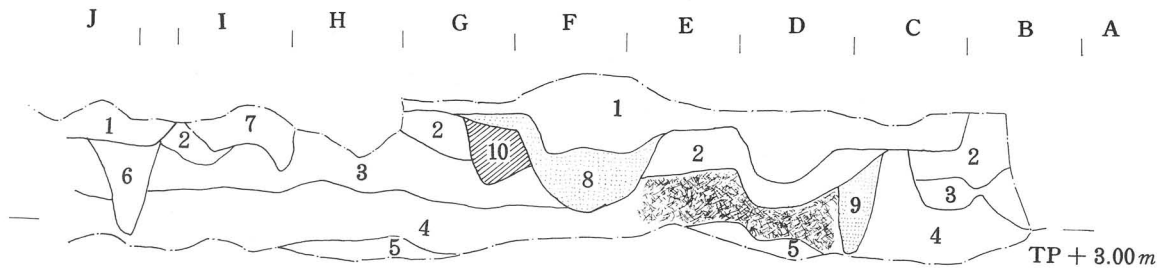
1. 調査に至る経過

萱振遺跡の北半は、西郡麿寺を中心として弥生時代から中世に至るまでの遺構群としてまとまりのある区域で、昭和57年度より大阪府教育委員会によって府立高校建設に伴う大規模な発掘調査が実施されて以降今日まで府、市教育委員会、⁽¹⁾(財)八尾市文化財調査研究会によって⁽²⁾断続的な発掘調査が実施されている。今回の調査は、昭和61年9月1日八尾市桂町2丁目先市道において公共下水道敷設に伴い立会を行なったところ、平安時代末期の遺物包含層を検出したため、八尾市下水道部に工事の中止を申し入れると共に、工事箇所において遺構範囲の確認調査を実施した。その結果地表下1.3m～2.3mの間に平安時代末から古墳時代の遺構を確認した。発掘調査は、この時の調査区をⅠ区とし、その東37mをⅡ区、さらにその東89mをⅢ区とし、Ⅱ区Ⅲ区について遺構存在状況把握のため断面図を作成する目的で実施したものである。この為、調査区は西より3m毎に細かく区分し、それぞれABC…と小区画名を設定し、地表下1.3m以下1mの範囲の断面実測を実施した。調査期間は、Ⅰ区が9月2日～3日、Ⅱ区が9月26日～10月3日、Ⅲ区が10月20日～22日である。

2. 調査の概略

Ⅰ区では平安時代末の土坑を2箇所確認し、そのベースの砂層に古墳時代初頭の古式土師器を包含していることを確認した。

Ⅱ区の層序は、地表下1.3m以下第1層(灰褐色粘質土)が中世以降の整地土で、第2層(青灰色粘土)、第3層(淡青灰色シルト～微砂)が古墳時代以後の遺構のベースになっている。



- | | |
|------------------|----------|
| 1 灰褐色粘質土 | 6 暗青灰色粘土 |
| 2 青灰色粘土 | 7 暗灰色粘土 |
| 3 淡青灰色～黄灰色シルト～微砂 | 8 褐色砂 |
| 4 濃灰色粘土 | 9 淡灰色砂 |
| 5 灰色粘土 | 10 暗灰色粘土 |

第2調査区断面図(縦S = 1/40 横S = 1/200)

第4層(濃灰色粘土)は弥生時代後期の遺物包含層となる。第5層(灰色粘土)以下は無遺物層である。当調査区の遺構としては、F～G区で古墳時代初頭の土坑、E～F区で河川跡、C～E区で弥生時代後期の土器集積を検出した。

土坑1 E区とF区の間で検出した径1.5m深さ80cm程の土坑で、布留式最古相の土器が一括出土している。

土坑2 C区とD区の間で弥生時代の土器集積を切り込んで検出したもので、時期は土坑の底より出土した高杯から古墳時代初頭に比定できる。

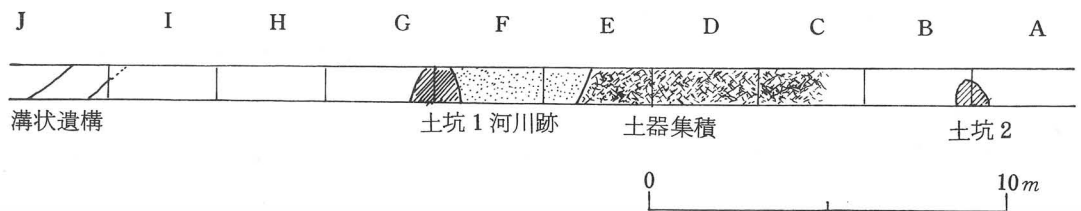
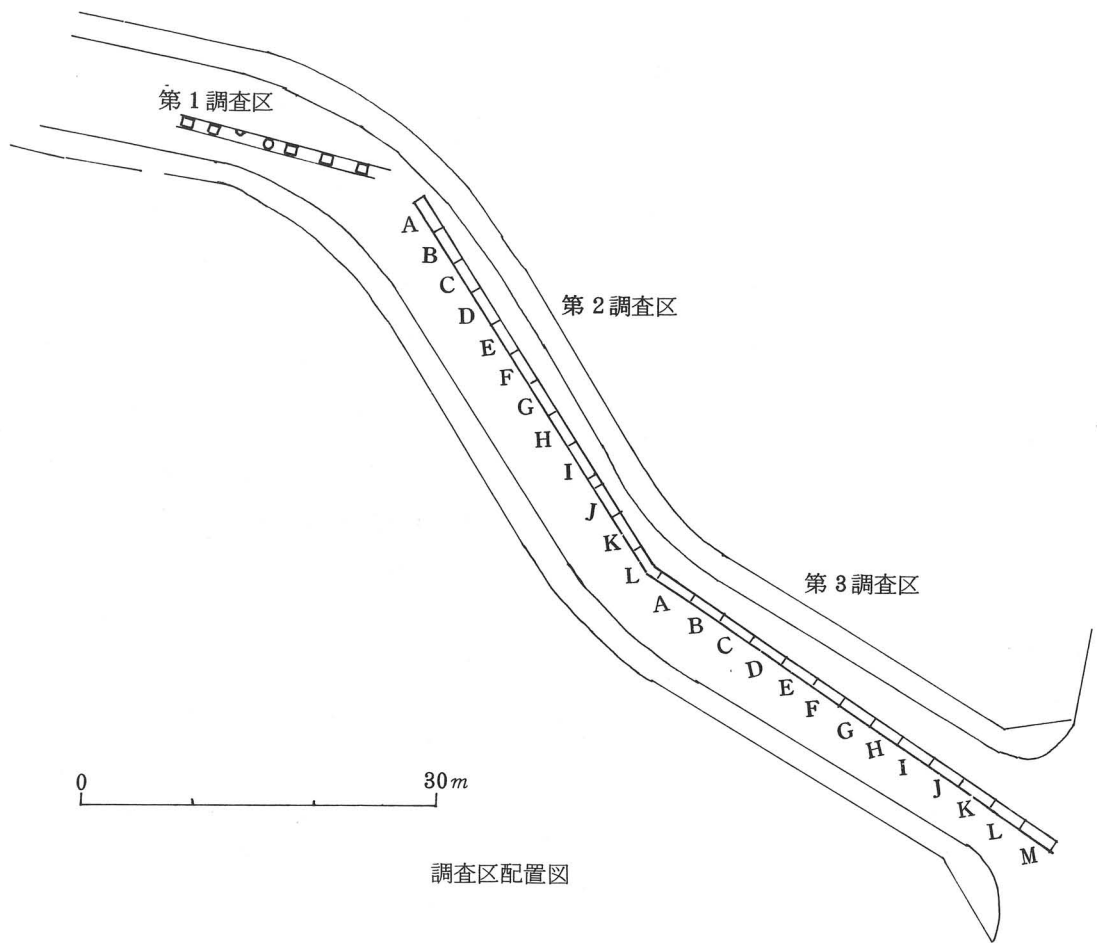
河川跡 E区からF区にかけてみられる粗砂の堆積であり、東で土坑1を切り込み西で弥生時代後期の土器集積を切り込んでいる。粗砂の底より古式土師器片がまとまって出土している。

土器集積 濃灰色粘土層はC区～E区の間では弥生時代後期の土器を密に包含している。この範囲においては、明確な遺構の形状を確認することができなかった。

Ⅲ区では、上記2.3.4層とも遺構、遺物がほとんど認められず、2.3層は粗砂に、4層は粘性の強い粘質土になり、集落域から外れているようである。

3. 出土遺物

(1～24)は土坑1で出土している。(1～11)は外面を篋磨きし、赤褐色を呈する精製された土器である。小型丸底壺(1～3)は口縁部が発達し、内湾ぎみに開くものである。これと円錐形の脚部を持つ小型器台(4.5)、有段口縁を持つ小型鉢(7.8)とのセットは小型精製三種土器とされる。6は窪み底を持つ小型鉢である。(10.11)は直口壺で(10)の底部は格子状の圧痕がみられる。(12～14)は庄内河内型甕で(14)は口頸部が小さく、最大径が下方に在り、丸底を呈するものと思われ、庄内期Ⅴの庄内甕の特徴を持つ。肩部付近まで刷毛調整するものもこの時期の庄内甕に多い特徴である。(15.16)布留式に典型的な甕で、口縁部が内湾して開き、



第2調査区遺構配置図

端部が丸く肥厚するとともに体部外面に細かい刷毛調整をほどこす古式の布留式甕の特徴をもつ。(17)は吉備地方の甕でいわゆる亀川上層式とされる新相の吉備甕の特徴を有する。(18～24)は直口の長胴甕で小平底を持つ尖がりぎみの底部が特徴的である。器種の個体数は、当遺構の中で最も多い。(19)は外面に叩きめを残し、刷毛調整をするが他は外面を篋なでする。胎土は石英、長石の細粒を含み精良な胎土を持つもの(18. 19. 23)、花こう岩片の角レキを含むもの(21. 24)、チャートの円礫を多く含むもの(20. 22)がある。後二者については明らかに河内平野の沖積地の砂礫では製作不能である。この種の甕は、萱振遺跡緑ヶ丘地区 S E 03、⁽⁴⁾八尾南遺跡 S W 4、⁽⁵⁾中田一丁目土坑 2 など中河内の庄内期 VI～V の遺構に若干類例がみられる。しかし中河内で系譜を辿れるものはなく外来系の土器であると思われるが今後その出自を明確にすることが課題である。

(25～31)はⅡ-C～E区の土器集積より出土したものである。甕(25～27)は肩部が膨らみ、下すぼみの形状を呈する。長頸壺は肩部に篋記号文がみられる。(30. 31)は中空の脚部を持つ高杯で、外面を篋磨き調整する。(30)は内湾して立ち上がる口縁を持ち、(31)は屈曲外反する口縁を持つ。これらの土器は全て弥生時代後期後半に比定できる。

(32)は庄内式の新相にみられる高杯である。

4. まとめ

今回の調査は、調査範囲の制約と、緊急性を要したため、面的な発掘調査により遺構の形状、性格を把握することができず、断面の観察と遺物採集に止まらざるを得なかったことは非常に惜まれる。しかし採集した遺物や断面で確認した遺構の存在は、当遺跡の範囲、時期を知る上で貴重な手懸となった。特に弥生時代、古墳時代、平安時代の各時代にわたる遺構遺物の存在は、付近の調査地と関連づけることのできる意義のある資料となるであろう。

註

- (1) 広瀬雅信「萱振遺跡発掘調査速報」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会 1984
- (2) 原田昌則他「萱振遺跡(第1次調査)」『昭和59年度事業報告』八尾市文化財調査研究会 1985
- (3) 米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器について」前掲
- (4) 大野薫『萱振遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会 1983
- (5) 八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』1981
- (6) 米田敏幸「中田1丁目39出土土器について」『八尾市文化財紀要Ⅱ』八尾市教育委員会1986

遺物番号 (図版)	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
--------------	----	------------------	-------	-------	-------

・SK-1

1	小型丸底壺	口径 10.5(4/5) 器高 7.9	外面 口縁部～体部上半はハクナデののちヘラミガキ。 体部下半～底部はヘラクズリののちヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部はナデ。	淡灰褐色。 赤褐色酸化粒を多量に含み、 雲母・長石を少量含む。	焼成良好。
2	小型丸底壺	口径 10.8(完存) 6.05	外面 口縁部～体部上半はヘラミガキ。体部下半～底 部はハクナデののちヘラミガキ。 内面 口縁部～体部はハクナデののちヨコナデ。底部 はヘラクズリ。	淡灰褐色。 赤褐色酸化粒・雲母・長石・ チャートを含む。	焼成良好。
3	小型丸底壺	口径 11.2(完存) 器高 7.1	外面 口縁部～体部上半はヘラミガキ。体部下半～底 部はヘラクズリ、ハクナデののちヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部はナデ。	外面 黒色～淡灰褐色。 内面 灰色～淡灰褐色。 赤褐色酸化粒・雲母を多量に 含み、長石を少量含む。	焼成良好。 外面底部に黒斑あり。
4	器台	口径 8.8(完存) 7.7 11.2	裾部に3方向の円孔。 外面 台部上半はヘラミガキ。台部下半は面取りのの ちヘラミガキ。裾部はヘラミガキ。 内面 台部はヘラミガキ。裾部はナデ。	外面 暗灰褐色～灰褐色。 内面 灰褐色。 赤褐色酸化粒を多量に含み、 雲母・長石を少量含む。	焼成良好。
5	器台	口径 10.3(完存) 器高 10.0 底径 11.8	裾部に4方向の円孔。 外面 台部上半はヘラミガキ。台部下半～裾部上半は 面取りののちヘラミガキ。裾部下半はヘラミガキ。 内面 台部はヘラミガキののち暗文状のヘラミガキ。 裾部はハクナデ(6本/1cm)裾底部はハクナ デののちヨコナデ。	淡黄褐色。 長石・雲母を微量含む。	焼成良好。
6	鉢	口径 14.3(完存) 器高 6.2 底径 3.0	外面 ナデののちヘラミガキ。 内面 口縁部～杯部上半はヘラミガキ。底部はナデ。	外面 暗灰褐色～淡灰褐色。 内面 淡黄褐色。 雲母・長石を少量含み、赤褐 色酸化粒を微量含む。	焼成良好。
7	鉢	推定口径 16.2(1/2) 器高 5.0	外面 ヘラミガキ。磨耗著しい。 内面 ナデ。	灰褐色。 長石・雲母・赤褐色酸化粒を 含む。	焼成良好。
8	鉢	推定口径 16.8(1/4)	外面 口縁部はヘラミガキ。杯部はハクナデ(8本/ 10m)ののちヘラミガキ。 内面 口縁部はヘラミガキ。杯部はナデ。	乳灰褐色。 石英を多量に含み、長石・赤 褐色酸化粒を少量含む。	焼成良好。
9	高杯	推定口径 17.2(1/2) 器高 13.9 底径 11.8	脚底部に3方向の円孔。 外面 磨耗のため調整不明。 内面 杯部は磨耗のため調整不明。脚部はナデ。脚柱 部にしほり目を残す。	灰褐色～淡灰褐色。 長石・雲母を多量に含み、赤 褐色酸化粒を少量含む。	焼成良好。
10	長頸壺	推定口径 12.8(1/2) 器高 18.6 最大径 14.1	外面 ハクナデ(7本/1cm)ののちヘラミガキ。 内面 口頸部はハクナデ(7本/1cm)ののちヘラミ ガキ。体部は指押さえ、ナデ。	外面 黒色～淡灰褐色。 内面 淡灰褐色～乳灰褐色。 チャート・雲母・石英を多量 に含む。	焼成良好 外面底部に黒斑、ヘラ記 号状の格子文あり。
11	長頸壺	推定口径 16.8(1/2)	外面 ヘラミガキ。 内面 口頸部はヘラミガキ。体部はナデ。	淡赤褐色～淡灰褐色。 雲母を多量に含み、赤褐色酸 化粒・長石を微量含む。	焼成良好。
12	甕	推定口径 13.5(1/3)	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	暗灰褐色 角閃石・雲母を多量に含み、 石英・長石を少量含む。	焼成良好。
13	甕	推定口径 17.0(1/5)	外面 口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(6条/1cm) ののちハクナデ(7本/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。体部はヘラクズリ。	淡灰褐色。 角閃石・雲母・長石を多量に 含む。	焼成良好。
14	甕	推定口径 15.8(1/2)	外面 口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(7条/1cm) ののちハクナデ(7本/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。体部はヘラクズリ。	外面 黒色～淡灰色 内面 淡灰褐色 角閃石・雲母・長石を多量に 含む。	焼成良好。 外面全面に煤付着。
15	甕	推定口径 13.0(1/4)	外面 口縁部はヨコナデ。体部はハクナデ(10本/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。体部はヘラクズリ。	淡灰褐色～淡灰褐色。 長石・雲母・石英を多量に含 む。	焼成良好。
16	甕	推定口径 16.0(1/3)	外面 口縁部はヨコナデ。体部は磨耗のため調整不明。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は指押さえ、ヘラクズ リ。	外面 黒色～淡黄褐色。 内面 淡灰褐色。 チャートを多量に含み、石英 ・雲母を微量含む。	焼成良好。 外面体部一部に黒斑あり。
17	甕	推定口径 16.4(1/3)	外面 口縁部はヨコナデののち櫛歯文(8本/1.1cm) 内面 ヨコナデ。	淡灰褐色。 長石・雲母を多量に含む。	焼成良好。

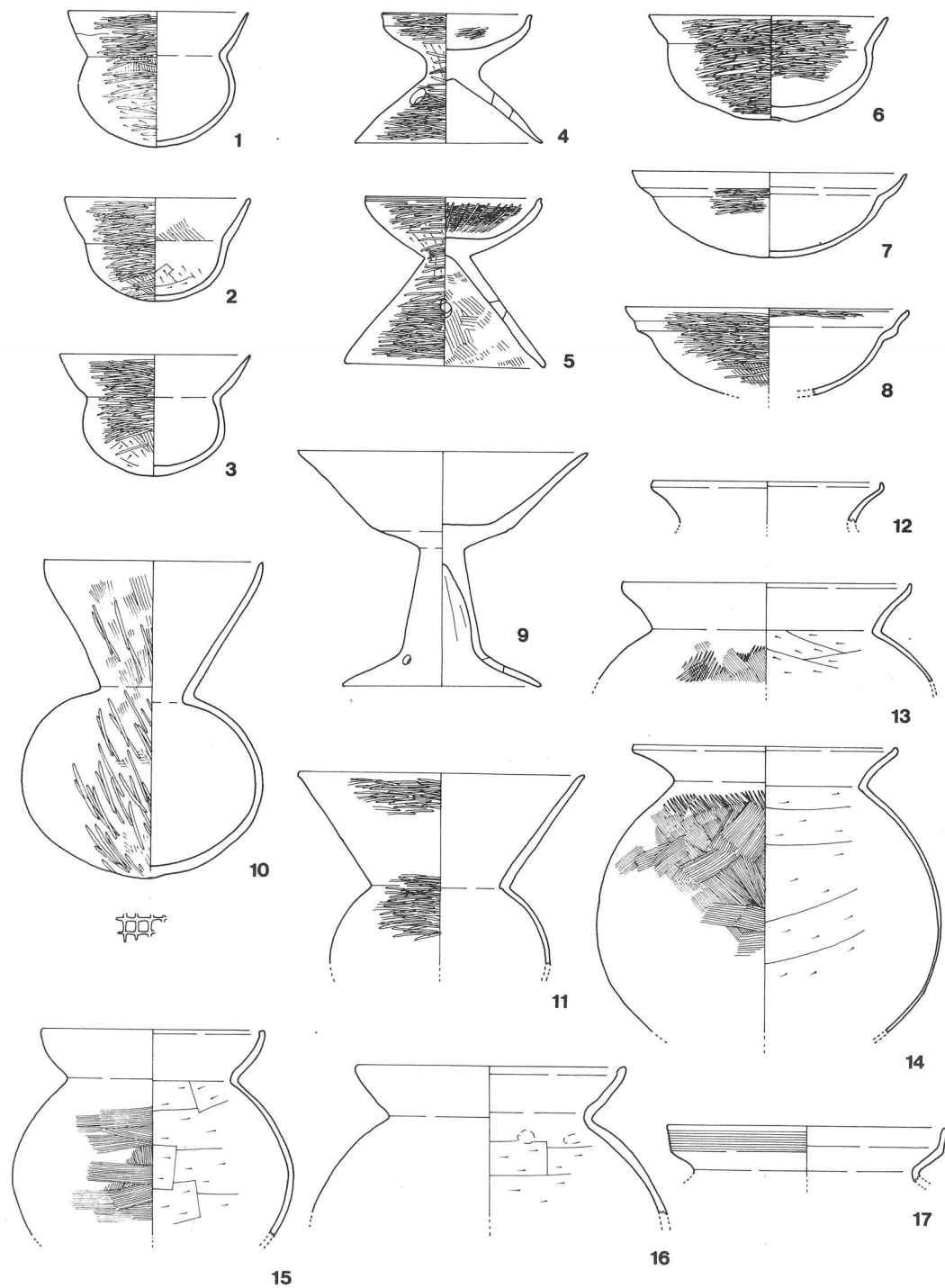
遺物番号 (図版)	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
18	甕	口径 13.5(5/6) 器高 22.8 最大径 17.6 底径 4.2	外面 ヘラナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	外面 黒色～淡灰褐色。 内面 淡灰褐色～淡黄褐色、 淡赤褐色。 長石・雲母を微量含む。	焼成良好。 外面全面に煤附着。
19	甕	推定口径 12.8(1/6) 器高 22.2	外面 口縁部はナデ。口頸部～体部上半はタタキ(4 条1cm)のちハケナデ(11本/1cm)。体部下半 ～底部はタタキのちヘラナデ。 内面 口縁部はハケナデ(11本/1cm)。体部上半は指 押し、ナデ。幅1.7cmの粘土のつなぎ目を残す。 底部はハケナデのちナデ。	外面 黒色～淡灰褐色。 内面 淡灰褐色。 赤褐色酸化粒・長石を多量に 含む、雲母を微量含む。	焼成良好。 外面体部下半～底部に煤 附着。
20	甕	口径 12.6(完存)	外面 タタキのちヘラナデ。 内面 ヘラナデ。	外面 黒色～淡黄褐色。 内面 淡黄褐色～淡灰褐色。 赤褐色酸化粒・長石・石英チ ャートを多量に含む。	焼成良好。 外面体部下半に煤附着。
21	甕	口径 12.0(7/8) 器高 22.7 最大径 16.6 底径 3.4	外面 ナデ。 内面 ナデ。	外面 黒色～淡灰褐色。 内面 灰褐色。 長石・石英を多量に含む、雲 母を少量含む。	焼成良好。 外面体部一部に黒斑あり。
22	甕	推定口径 15.4(1/3)	外面 磨耗のため調整不明。 内面 ヘラナデ。磨耗著しい。	淡灰褐色。 石英・長石を多量に含む、赤 褐色酸化粒・雲母を少量含む。	焼成良好。
23	甕	底径 1.8(1/2)	外面 ナデ。 内面 ヘラナデ。	外面 黒色～淡灰褐色。 内面 暗灰褐色～淡灰褐色。 チャートを多量に含む、赤 褐色酸化粒・雲母を少量含む。	焼成良好。 外面体部下半～底部に黒 斑あり。
24	甕	推定口径 17.4(2/3)	外面 磨耗のため調整不明。 内面 ナデ。	外面 灰黄色～淡黄褐色。 内面 淡灰褐色。 長石・石英を多量に含む、赤 褐色酸化粒・雲母を微量含む。	焼成良好。

○C区・D区・E区包含層

25	甕	口径 14.8(2/3) 最大径 21.0	外面 口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(3条/1cm)、 中央に粘土のつなぎ目を残す。磨耗著しい。 内面 口縁部～体部上半はナデ。幅0.9cmの粘土のつ なぎ目を残す。体部下半は板目ナデ(7本/1cm)。	外面 黒色～暗灰褐色 内面 灰褐色 長石・雲母・石英を多量に含 む。	焼成良好。
26	甕	推定口径 14.8(1/2)	外面 口縁部はヨコナデ。幅0.1cmの沈線を2条施す。体 部はタタキ(3条/1cm)のちヘラナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部はヘラナデ。	黒褐色～淡灰褐色。 角閃石・雲母・長石を多量に 含む。	焼成良好。 外面体部一部に煤附着。
27	甕	推定口径 15.2(1/2) 器高 19.0 底径 4.7	外面 口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(4条/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は板目ナデ(7条/1cm)。	外面 黒褐色～灰褐色。 内面 淡灰褐色。 角閃石・雲母・長石を多量に 含む、石英を少量含む。	焼成良好。
28	壺	推定口径 10.0(1/3)	外面 ヨコナデ。幅0.1cmの沈線を1条施す。 内面 ヨコナデ。	暗灰茶色。 角閃石・雲母・長石を多量に 含む。	焼成良好。
29	長頸壺	口径 10.0(完存) 器高 19.2 最大径 11.5 底径 4.7	外面 口縁部はヨコナデ。口頸部は板目ナデ(4本/ 1cm)。体部は板目ナデのちナデ。底部はナデ。 内面 口頸部は板目ナデ(4本/1cm)のちヨコナデ。 体部は後押しえ、板目ナデのちナデ。	外面 黒色～淡灰褐色。 内面 灰色～淡灰褐色。 石英・長石・雲母を少量含む。	焼成良好。 外面体部一部に黒斑あり。 外面肩部に3本の記号文 を施す。
30	高杯	推定口径 14.1(1/2) 器高 10.3 底径 3.4	脚底部に4方向の円孔。 外面 口縁部はヨコナデ。杯部はハケナデのちヘラ ミガキ。脚部はヨコナデのちハケナデ(6本 /1cm)。 内面 杯部はハケナデ(6本/1cm)のちヘラミガキ。 脚部はナデ。脚底部はヨコナデ。	淡灰黄色。 石英・雲母・長石を少量含む。	焼成良好。
31	高杯	推定口径 27.8(1/5) 器高 22.1 推定底径 19.6(1/2)	脚底部に4方向の円孔。 外面 口縁部はヨコナデのちヘラミガキ。杯部～脚 部はヘラミガキ。脚底部に幅0.15cmの沈線を1 条施す。 内面 杯部は磨耗のため調整不明。脚部はナデ。脚 底部上半はハケナデ(6本/1cm)。脚底部下 半はヨコナデ。	外面 灰褐色～灰褐色 内面 灰褐色。 角閃石・雲母を多量に含む、 長石・石英を少量含む。	焼成良好。

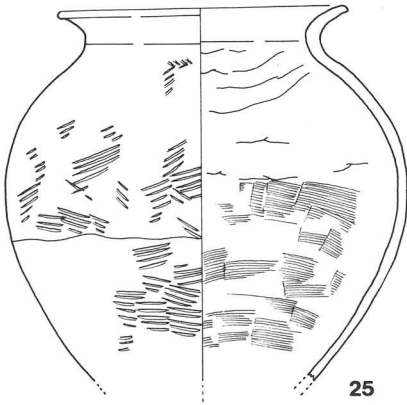
○SK-2

32	高杯	口径 22.6(完存) 器高 15.9 底径 15.5	脚底部に4方向の円孔。 外面 杯部はヘラミガキ。磨耗著しい。脚部は磨耗の ため調整不明。 内面 杯部は磨耗のため調整不明。脚部はナデ。し ぼり目を残す。脚底部は磨耗のため調整不明。	黒色～淡灰褐色。 長石・雲母を少量含む、赤褐 色酸化粒・石英を微量含む。	焼成良好。
----	----	-----------------------------------	--	--	-------

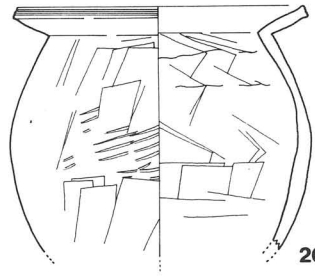


出土遺物

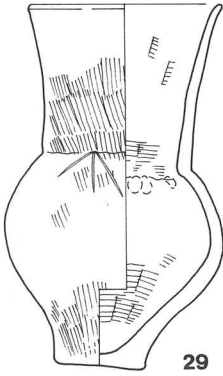
0 10cm



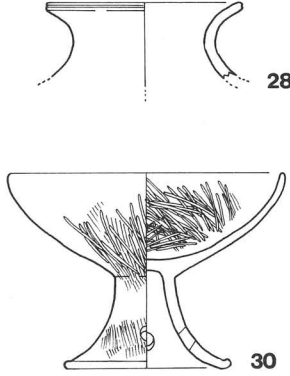
25



26

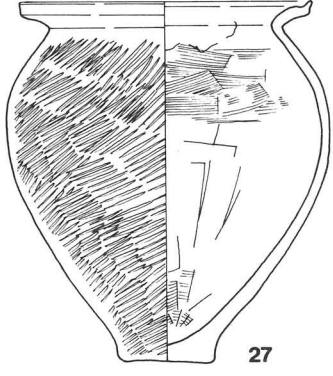


29

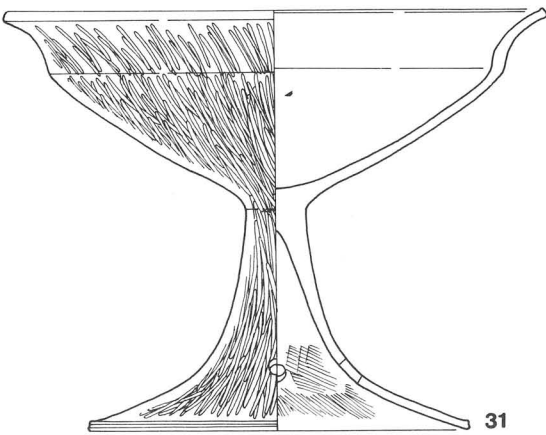


28

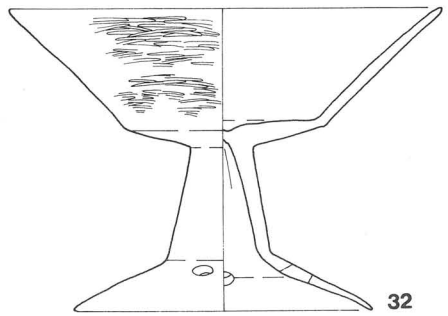
30



27



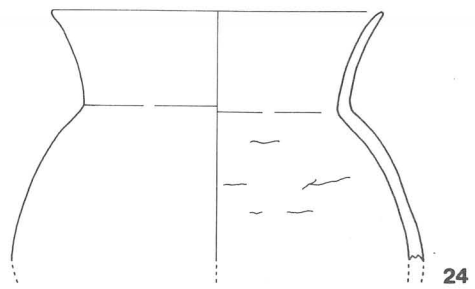
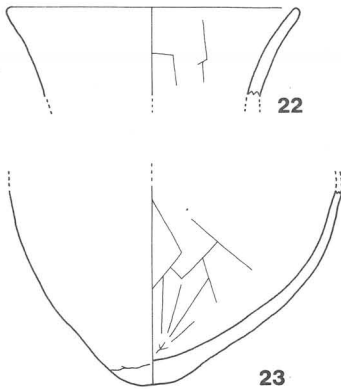
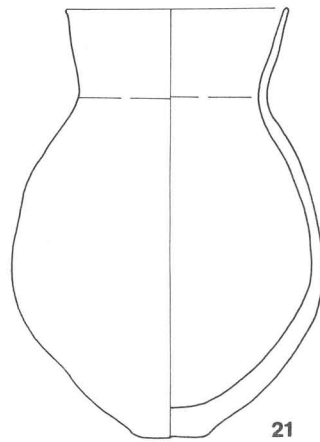
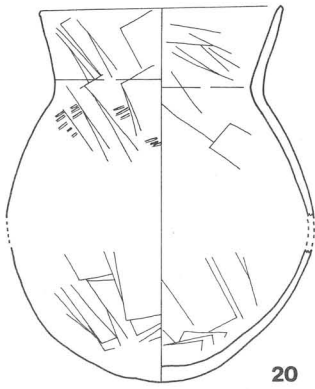
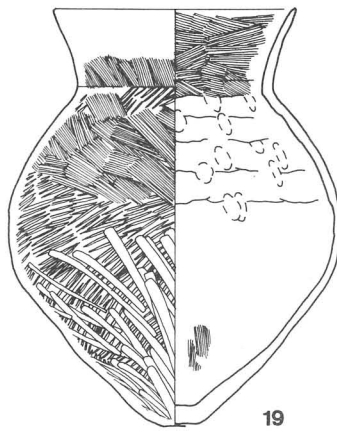
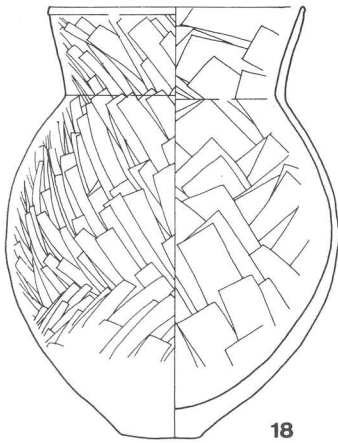
31



32

0 10 cm

出土遺物



0 10 cm

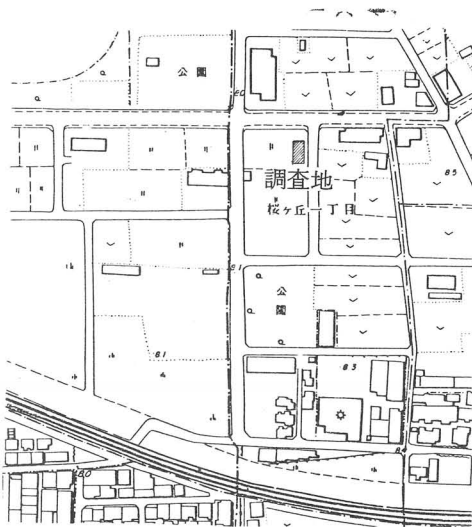
東郷遺跡 22次発掘調査概要

1. 調査に至る経過

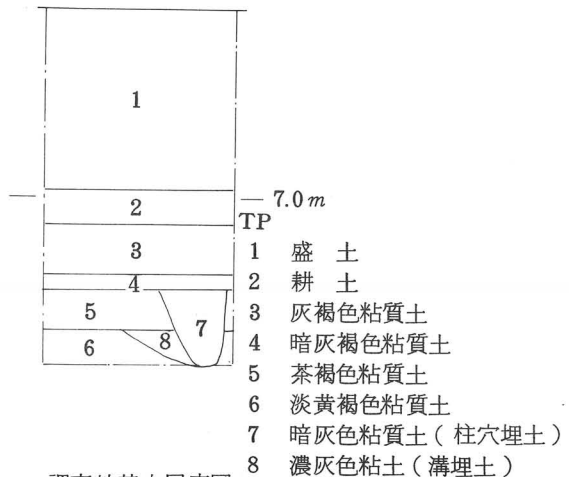
東郷遺跡は、弥生時代より平安時代に至るまでの集落遺跡で、昭和56年より今日に至るまでに21次にわたる発掘調査が実施されている。今回調査を実施した桜ヶ丘1丁目25.26は、東郷遺跡の東側に位置する。当地点より西側においては、古墳時代初頭の集落遺構、東側においては古墳時代中後期の遺構が確認されている。昭和61年11月7日に当該地において店舗建設に先だつ遺構確認調査を実施したところ地表下1.4m以下に古墳時代の遺物包含層を確認したため基礎工事を1.3m以内に留めるよう要請した。その結果基礎工法を変更した上で地下室を予定している部分については遺構の破壊がやむを得ないので、発掘調査を実施することで協議が成立した。発掘調査は昭和61年12月15日～27日までの間実施した。また基礎工事に際しては、文化財室職員が立会し、慎重にすすめられた。

2. 調査の概要

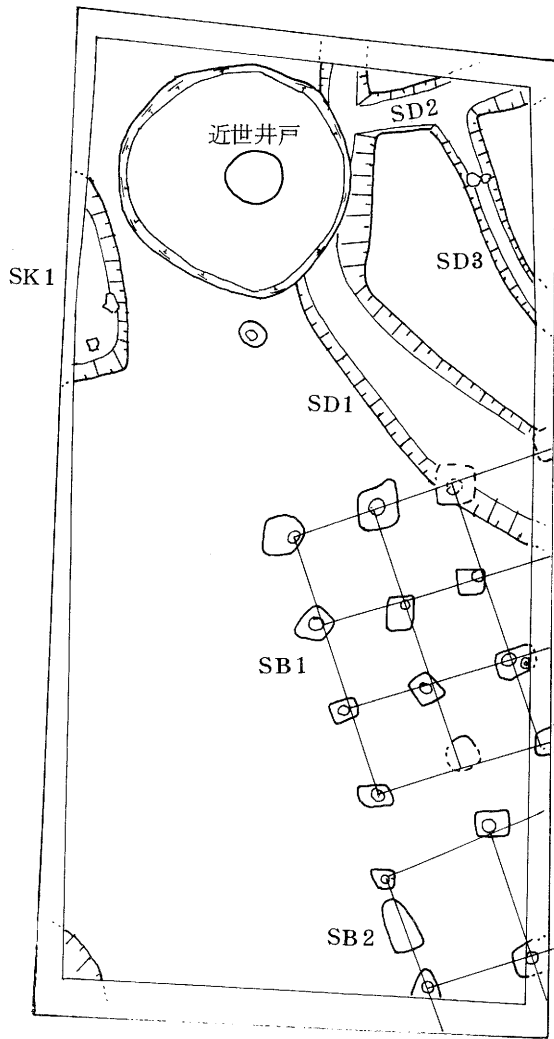
調査地の基本層序は、盛土が約1m、以下1.8mまで第1層旧耕土、第2層灰褐色粘質土、第3層暗灰褐色粘質土、第4層茶褐色粘質土、第5層淡黄灰色粘質土の層順となっている。遺物包含層は第3層暗灰褐色粘質土と第4層茶褐色粘質土で、第3層からは須恵器土師器および中世遺物が出土し、第4層では古式土師器が少量含まれている。遺構としてはTP 6.5m付近の第4層茶褐色粘質土上面から掘りこまれた建物遺構とTP 6.3m付近の第5層淡黄灰色粘質土上面から掘りこまれている溝と落ち込みがある。



調査位置図 S = 1/5000



調査地基本層序図



調査地平面図

0 5 m

建物（SB1） 調査地の中央東側で検出した3間×3間の総柱の建物である。建物の南北は4m以上を測る。柱穴は径20cmの木炭が混じる柱痕に径40～60cmの隅丸方形の掘り方をもつ。建物柱穴の一つの掘り方より、土師器高杯が出土している。

建物（SB2） 調査地の南東隅で検出した建物で東西南北各1間分を検出した。全体の規模は不明であるが柱間がSB1より広く各1.7mを測る。柱穴は、径20cmの柱痕に径40～60cmの隅丸方形の掘り方をもつ。建物西側の柱の間からは、土師器片を含む焼土坑を検出している。

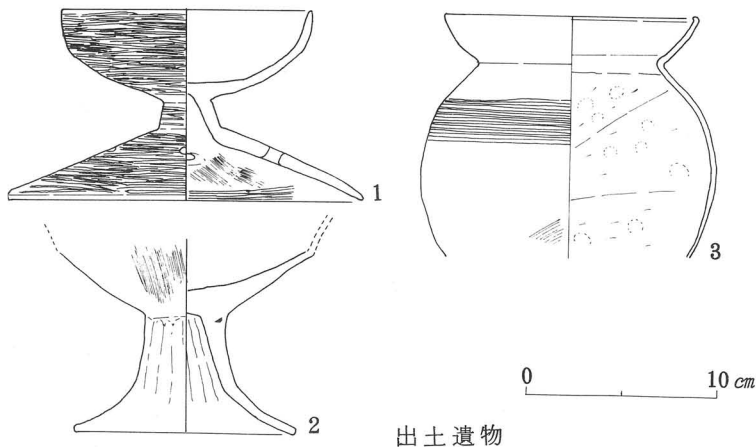
溝（SD1） 調査区の中央東端より、北側中央へ弧状にのびる溝で幅1～1.5m、検出面からの深さは約30cmを測る。溝内より庄内式に属する土器片を検出している。

溝（SD2） 調査区の北西付近で検出した東西方向の溝で、幅0.6m、検出面からの深さ約20cmを測る。西端はSD1に交差するが切り合い関係は不明である。

溝（SD3） 調査区の北西付近で検出した北南方向の溝で、幅0.5m検出面よりの深さ約10cmを測る。溝上面より庄内式の高杯が出土している。

落ち込み（SK1） 調査区北側西で検出した土坑、検出幅1m長さ3m以上を測る。検出面よりの深さは約20cmで布留式に属する土器が少量出土している。

3. 出土遺物



主要な遺物としては、SD3出土土師器高杯(1)、SB1出土高杯(2)、SK1出土甕(3)があげられる。

(1)は椀状の杯部に屈曲して開く短脚の脚部を持つもので、外面を横方向の細かい篋磨きを丁寧に行ない、杯部内面はナデ、脚部内面を刷毛調整する。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は石英、長石多く花崗岩片を含む。庄内式に典型的にみられる器種である。

(2)は口縁部を欠損するが太目の脚柱部を持ち、脚端部はなだらかに開く。杯底部外面は刷

毛調整、脚部は筥ナデがみられるが内面は摩耗の為調整不明である。色調は赤褐色を呈し、胎土に結晶片岩を多量に含む。布留式に属するものであろう。

(3)は内湾ぎみの口縁に、球形の体部を持つ甕で、体部外面肩部に横方向の刷毛がみられ、内面は筥削りで指頭痕が観察できる。色調は淡褐色を呈し、胎土に石英、長石、チャートを多量に含む。

4. まとめ

今回調査を実施したのは、東郷遺跡の中でも遺構の状況が明確にされていない部分にあたる。ここにおいて検出した建物跡は、庄内式の遺構より層位的に新しく、柱穴出土の土器より布留式に比定できるものであろうと考えられる。この建物は複数の倉庫跡の一部と考えられるが、付近における同時期の遺構の調査を待つ以外はない。しかし今回の調査は、調査範囲が限定されていたにもかかわらず、東郷遺跡の全体像を把握するための貴重な資料を提供することができた。



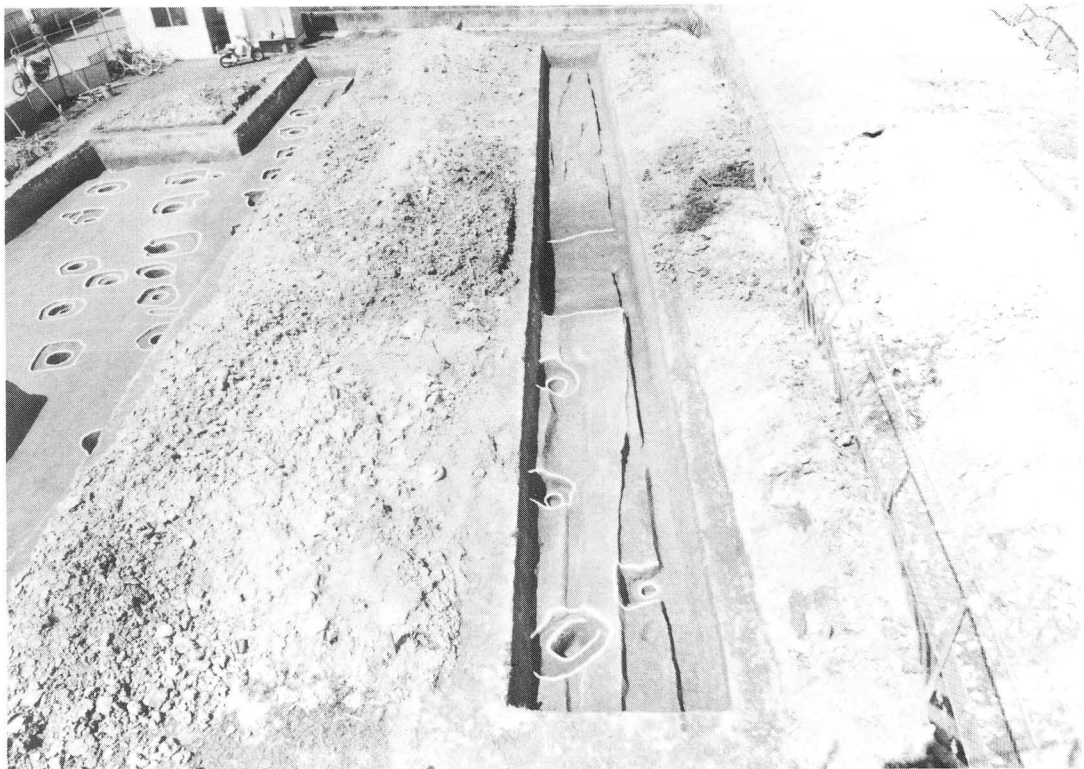
NWトレンチ上層遺構



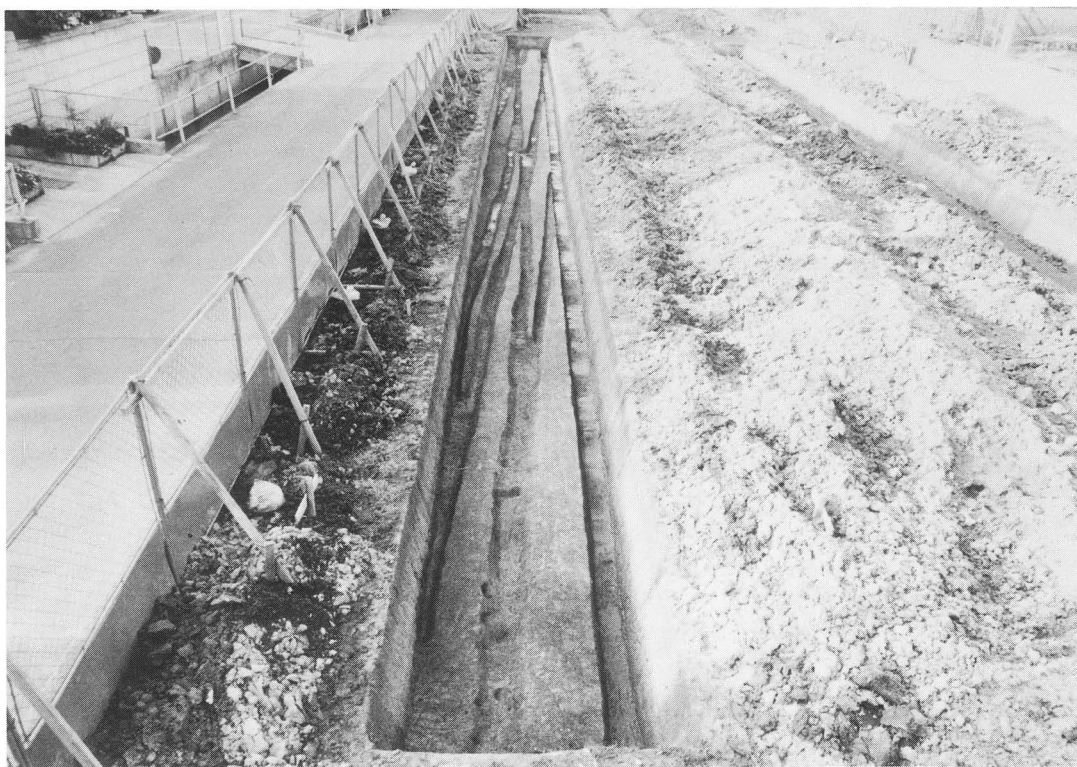
NWトレンチ全景



NEトレンチ上層遺構検出状況



NEトレンチ全景



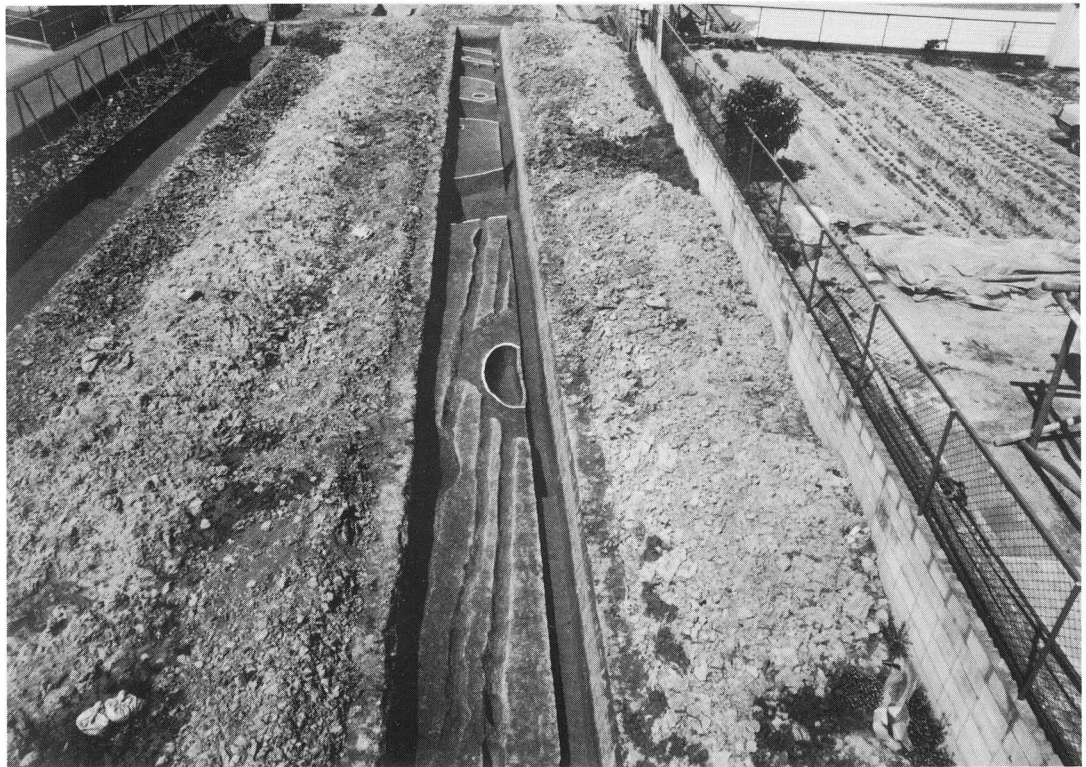
SWトレンチ上層遺構検出状況



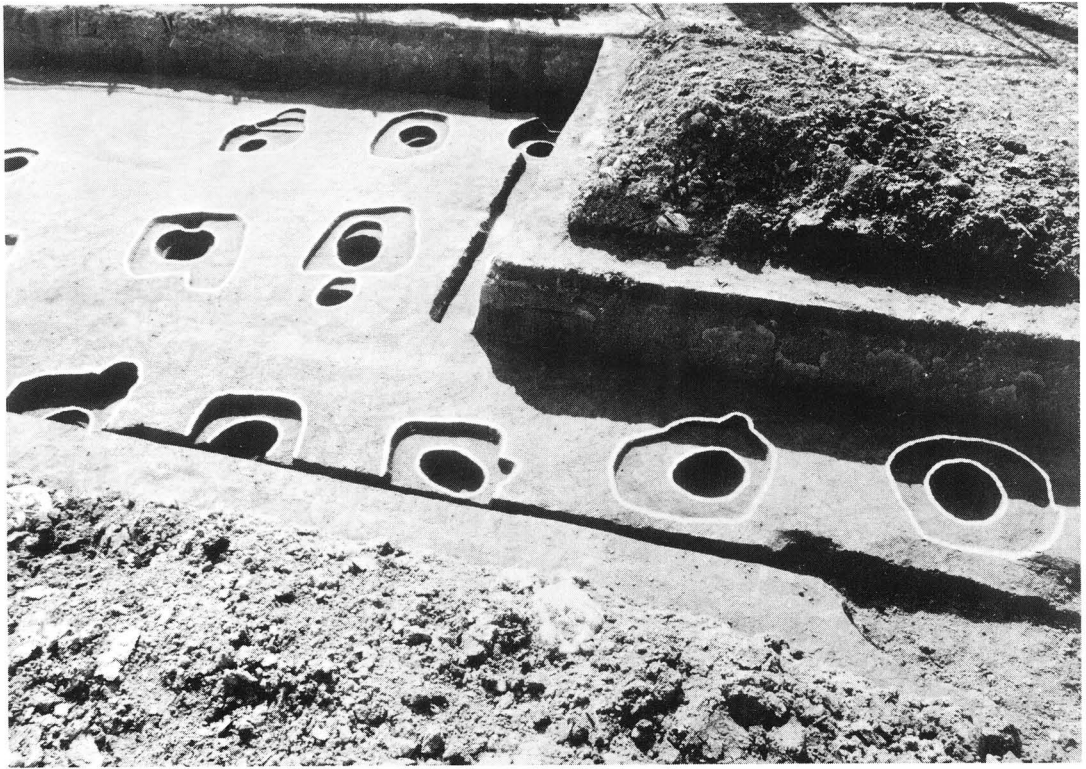
SWトレンチ全景



SEトレンチ層遺構検出状況



SEトレンチ全景



建物遺構 S B 1 検出状況



建物遺構 S B 2 検出状況



S D 3・4・5 検出状況



S D 4 遺物出土状況



SD 6 検出状況



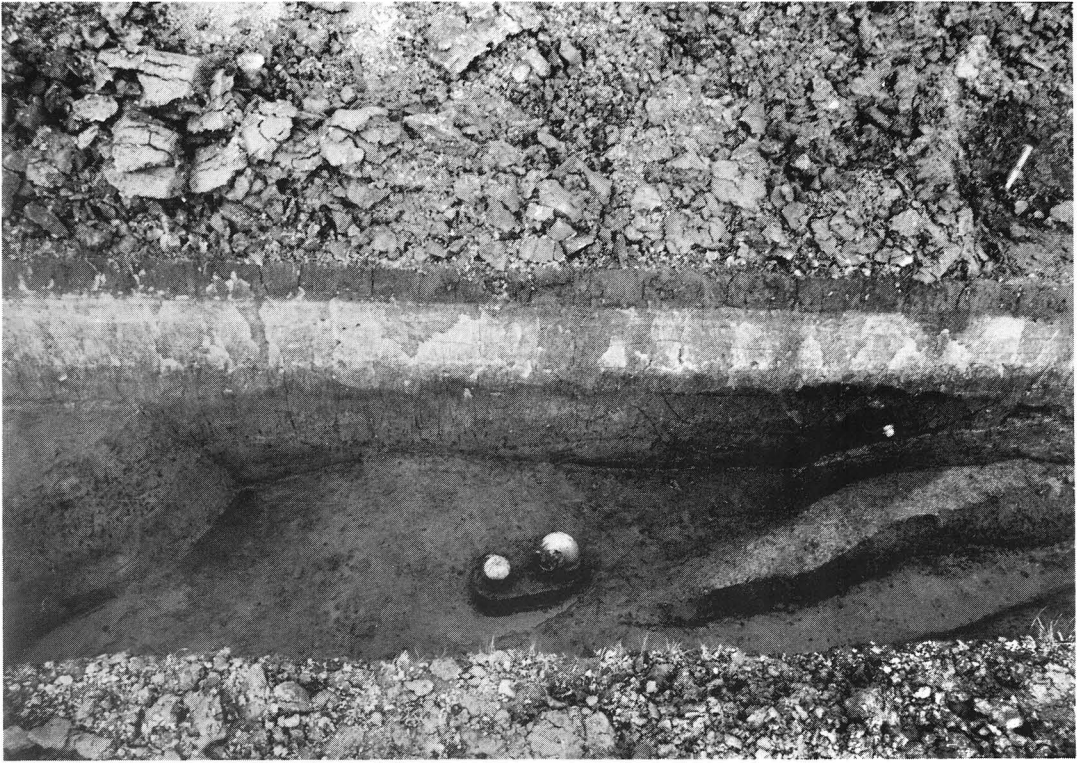
SD 7 検出状況



S D 8 検出状況



S D 9 遺物出土状況



S D 13 遺物出土状況



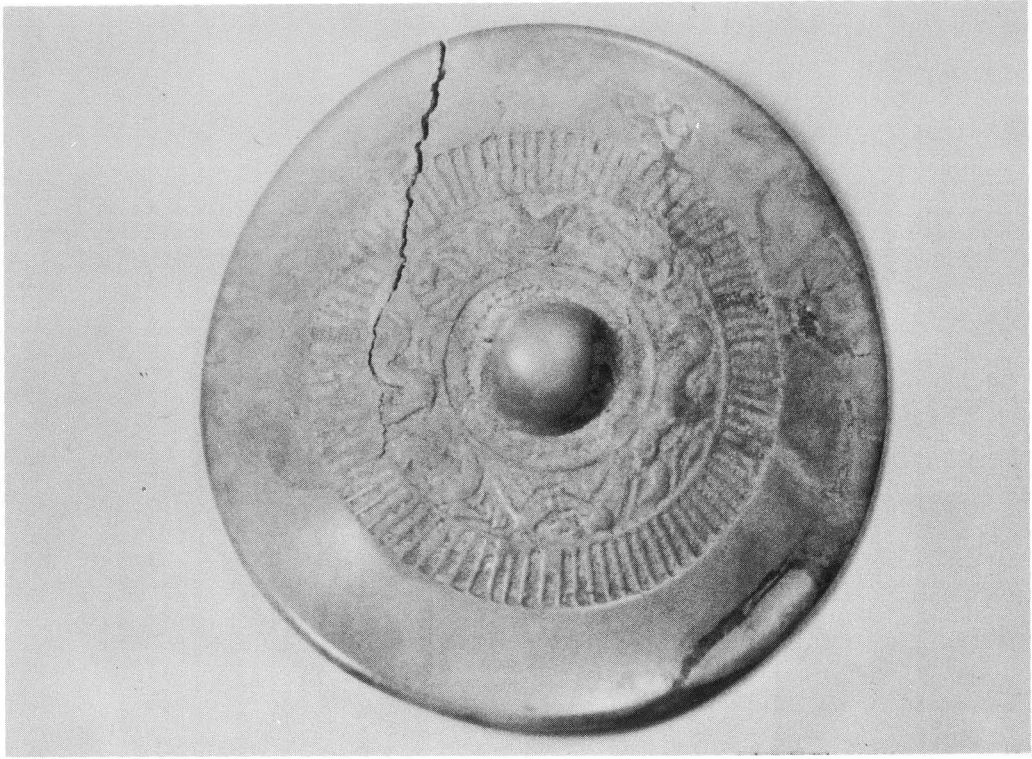
S D 13 遺物出土状況



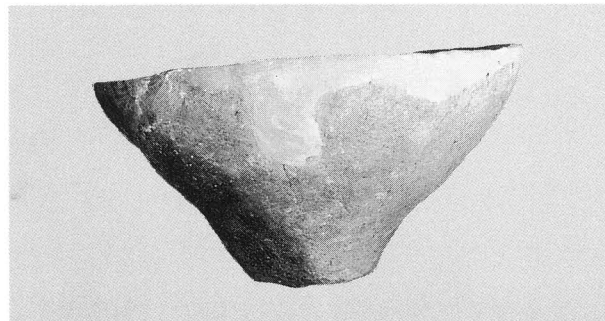
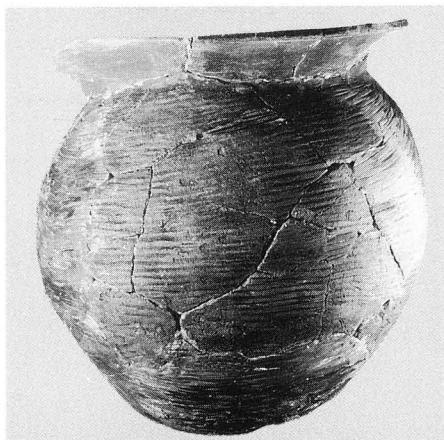
S D 13 銅鏡・土器出土状況

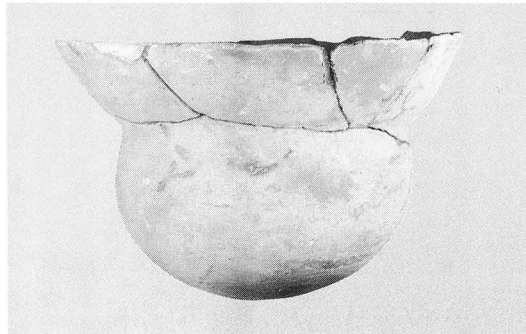
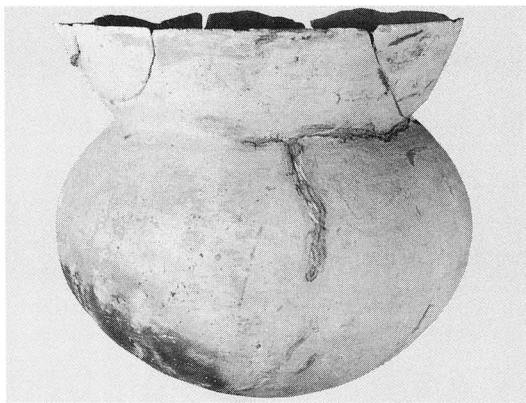
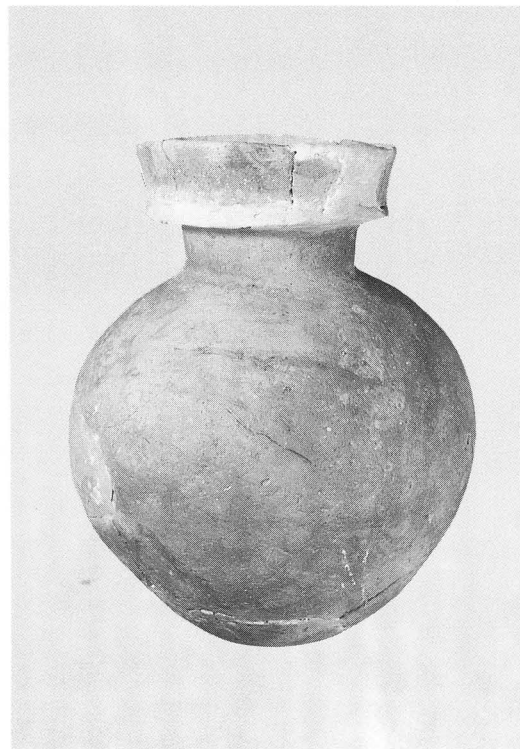
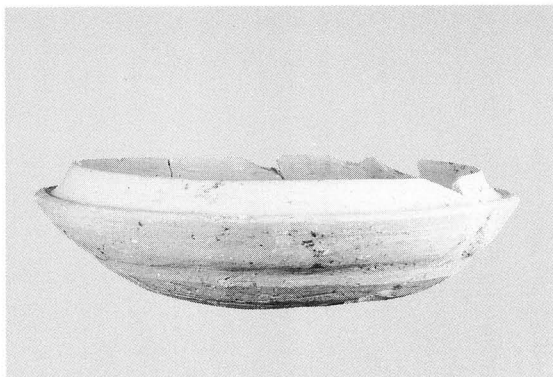
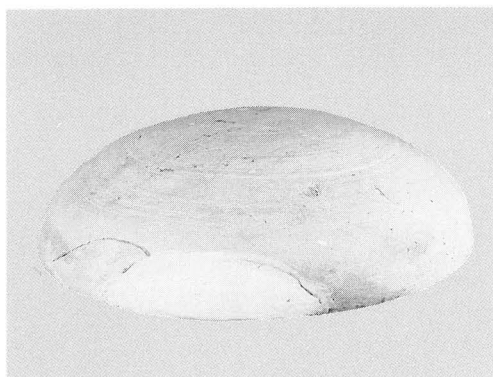


S D 13 銅鏡出土状況



S D 13 出土銅鏡





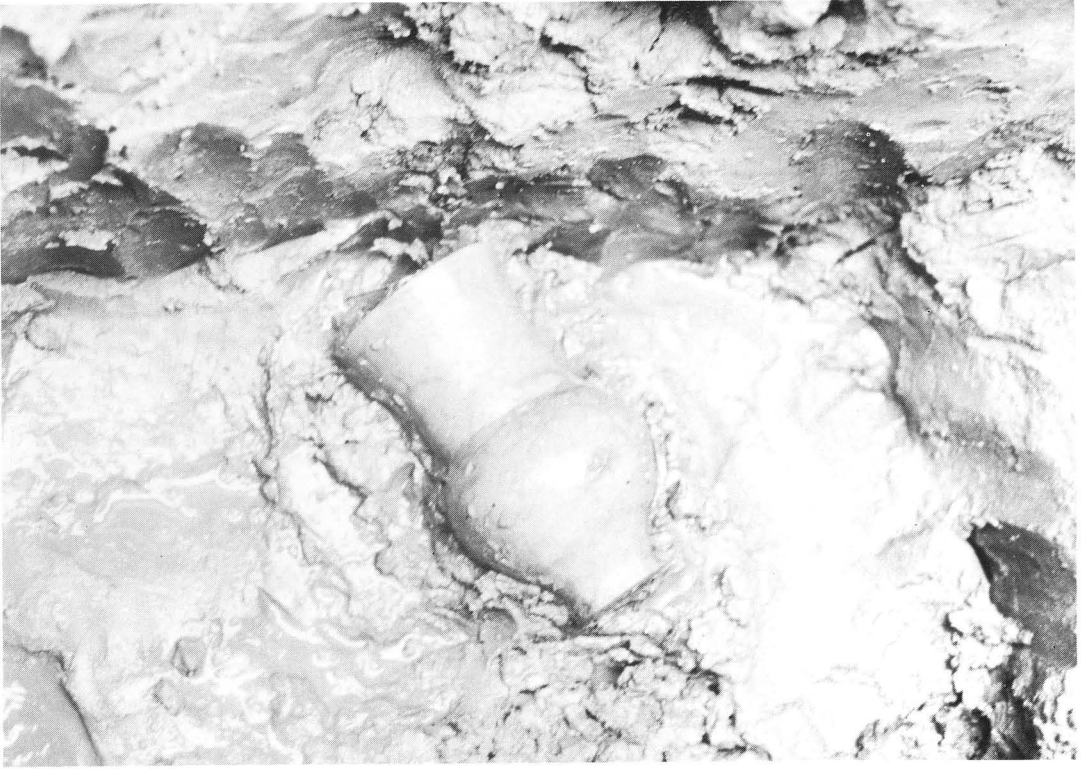
出土造物



浄化槽調査区全景



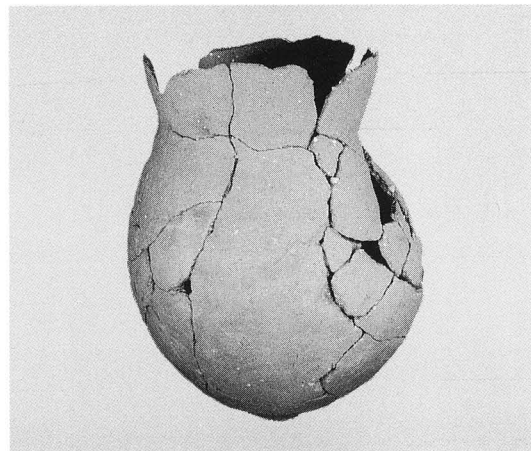
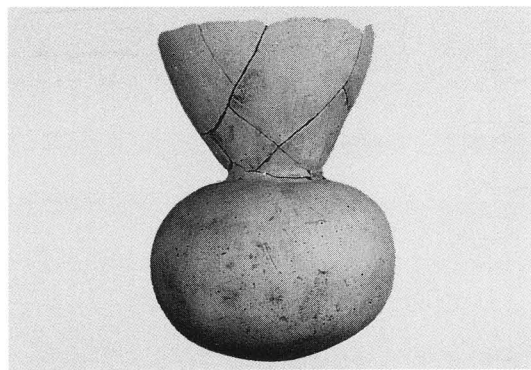
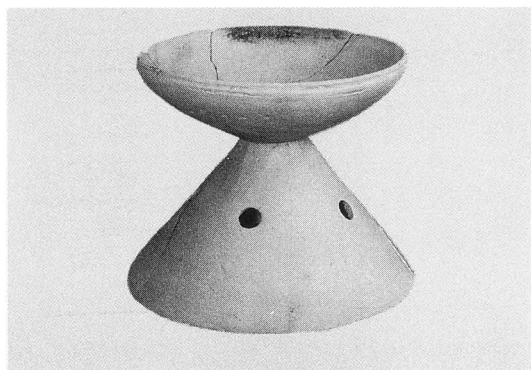
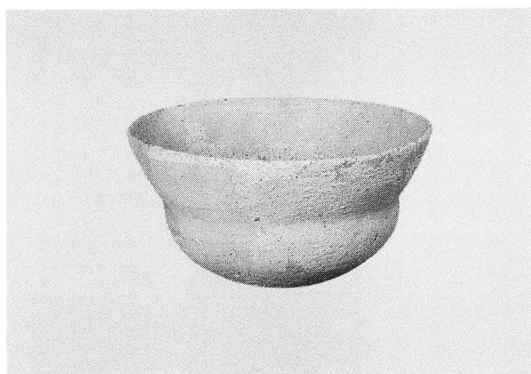
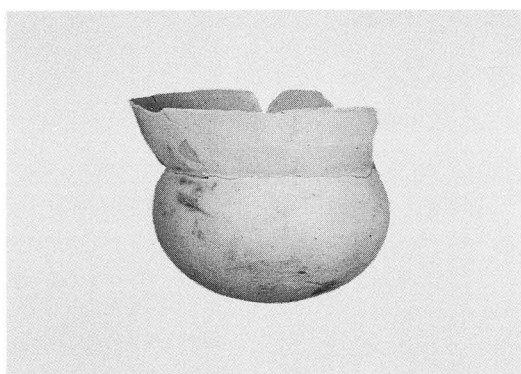
J 調査区壺棺検出状況



II - C区土器集積遺物出土狀況



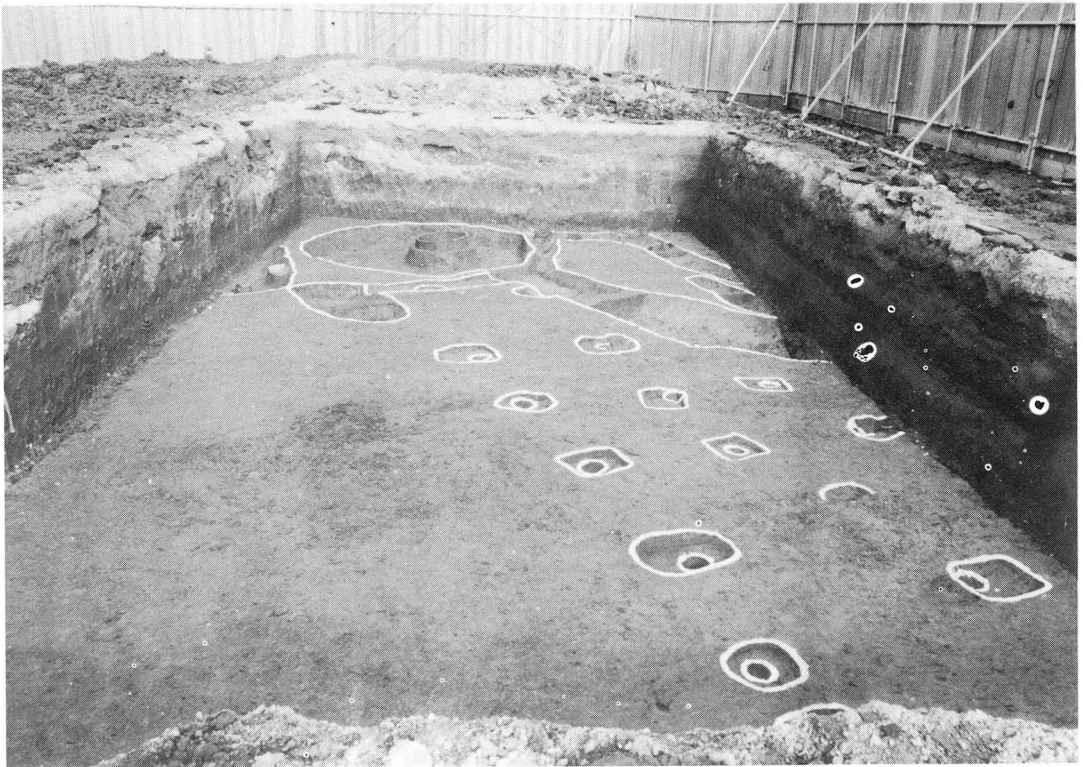
II - G区土坑 1 遺物出土狀況



土坑 1 出土遺物



調査区全景



建物遺構検出状況



